



普天間バプテスト教会50周年記念誌

沖縄バプテスト連盟
普天間バプテスト教会
附属緑ヶ丘保育園

「神の恵みと摂理の中で」

普天間バプテスト教会
牧師 神谷武宏

普天間バプテスト教会は、2008年に教会組織50周年を迎えました。教会の始まりは、一人の信徒（新里信姉）が普天間から那覇バプテスト教会へ通い続ける信仰から起こされています。当時、故照屋寛範師がその信徒のことを見かねて、1955年に普天間での開拓伝道が始められました。翌年伝道所となり、1958年7月、教会組織をしています。その間、故山路一師、故シュワルツ師、故ボーリンジャー師、国吉守師（現在那覇バプテスト教会牧師）が教会初期（～1962年）の頃に働かれています。その後、名護良健師が長く牧会され（～1995年。※中城城東教会を牧会しながら1997年まで兼牧。現在当教会名誉牧師）、当教会の基礎をつくられました。それは、「歴史を捨象しない」キリスト者の育成であり、《地の塩、世の光》としての教会のあり方であったかと思われます。さらに、藤田久雄師（～2000年。現在小録バプテスト教会牧師）、W.T.ランドール師（～2007年。現在当教会名誉牧師）と引き継がれ、現在に至っています。

「歴史を捨象しない」ということから、少し当教会の特筆すべき出来事に触れさせていただきます。それは、70年代後半から80年代にかけて、いわゆる「ランドール宣教師解任問題」が起き、教会内外において激動の時期をむかえたことです。当時、当教会の協力牧師であったランドール師が、宣教師派遣もとであるアメリカン・ボードから「米軍との不一致」を理由に宣教師職を解任されたのでした。またこの問題に伴い、同師の協力牧師留任を許す当教会の責任が問われ、「第30回沖縄バプテスト連盟年次総会」（1983年）にて連盟除名の討議がなされました。結局、反対者が多く否決されましたが、その後、数名の方が当教会を去るという分裂が起き、悲しく、辛い出来事として歴史に刻まれました。しかし別れていった方々によって新たな教会が生み出されたことは、神の摂理のように思います。この問題は十分に解決したとはいえませんが、ランドール師の人を恐れず、神を畏れ、平和を愛するキリスト者としての揺ぎ無い信仰は、信徒一人ひとりに大きな示唆を与えたものでした。

現在このような歩みの中で、ミカ書6章8節《正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩む》を教会聖句とし、教会の働きとして目指すべき指針であるとしています。それは、「歴史を捨象せず、平和を脅かす状況に警鐘を鳴らす」という《地の塩、世の光》としての役割を教会は担うべきであると考えからです。

当教会の50年の歩みは、主の憐みは勿論のこと、多くの方々による働きと祈り、またご支援の賜物であります。改めて感謝いたしますと共に、平和なるキリストの宣教に、これからもご一緒に歩んでいきたいと心から願います。

目 次

『歴史を担う教会を目指して』—普天間バプテスト教会40年史—	名護良健
William T. Randall, Pastor Emeritus, and Maxine Randall, Futenma Baptist Church Cooperating Pastor from May 1, 1977-March 31, 2000; Pastor from April 1, 2000-September 30, 2007.	
緑ヶ丘保育園の歩み	名護タケ
普天間教会史点描—沖縄伝道の思い出	山路 一
種は播かれた	山路 一
教会創立50周年に当たり	国吉 守
普天間バプテスト教会、心のふるさと。40周年おめでとうございます。 大河原健二郎	
御名を賛美致します	新里 信
あかし 40周年によせて	新里 信
教会40周年記念	新垣信子
開拓伝道時代の普天間バプテスト教会	平 節子
普天間教会の40周年にあたり	安里八重子（宜野湾志真志）
創り主の御手の中で	上間聡美
40年記念誌あかし	喜友名京子
伊波トヨ姉の思い出	城間啓子
証し	高木初江
短歌	比嘉昭子
証し 主に生きる	比嘉昭子
会堂に与えられた恵み	又吉弘子
50周年に寄せて	宮城明美
主の導きに感謝	大江田昌子
導かれていたランドール牧師との出会い	上里健次
奇妙な証し—反語的クリスチャンとしての私—	竹内 豊
自分史	安里正昌
神様ありがとう	仲松あかり
無題	志村健一・志村恵子
バイブルクラスで学んで	上原 進

『歴史を担う教会を目指して』—普天間バプテスト教会40年史—

1997.7.28起稿 名護良健

—目次—

- 1 普天間教会の教派的伝統とその地域特性—宜野湾市野嵩—
- 2 開拓伝道時代—草創期—
 1. 自給教会を目指して
 2. 自給の教会
 3. 歴史を担う教会を目指して—揺れる教会—
 4. 新しい歩みを
 5. 信仰の継承を目指して—新しい教会形成の時代へ—

1 普天間教会の教派的伝統とその地域特性

いわゆる教会成長路線に乗った大きな教会ではない、一つの教会がここにある。大きくはないが、キリストを信ずる者の一つの群れ、教会共同体であることには変わりはない。宜野湾市野嵩西門原—イリジョウバル—に立つ教会。ここにこの一つの群れは福音を携えて、福音を伝える為に開拓伝道を志した。あれから40年。そこでこれからこの教会がどういう福音理解のもとに立ち、どういう交わりを形成し、どうこの世に関わって行ったのか、そのことをおおまかにでもとらえることが出来たらと思う。ここで大切な事は、よって立つ教派の伝統と地域への関わりという楕円のかたちの中で、特に普通の信徒の歩みに注目し、勿論、道は人なり、と言われるように、実際に伝道の業を担った牧師、伝道者、宣教師たちの占める位置も否定はできないであろう。しかし、それにはついて来た信徒たちがいたからに他ならない。

ところで、開拓時代—未だ宜野湾村であった。時代背景を概観してみると、鳩山一郎が首相。沖縄ではアメリカ民政府による基地に関する「プライス勧告」が発表され、続いて土地の「地代一括払い方針」が声明として出された。瀬長亀次郎人民党市長が誕生—そしてアメリカ軍による追放。ムーア初代高等弁務官が就任したのもそのころであった。さて、この地域であるが戦後は純農村が難民収容所と化した地域である。市史によると、肉片飛び散り、血の匂い立ち込める戦場から命びろいして、あるいは徒歩で、或いはトラックで続々と各地から避難民が送り込まれて来たという。戦前は戸数200戸、人口1000人に足りない純農村で、神戸牛の産地として知られ、大豆、芋などの生産で知られ、わりと豊かな地区で半数が赤瓦葺の家であったと言う。戦没者は320人にもなり、教会玄関下にはその慰霊碑が建っている。

次に、普天間教会の教派的伝統について少しく触れよう。いうまでもなくバプテストの教えの伝統に立つものであるが、このことは少し説明を必要とする。祖国復帰後の特徴的なこととして、おしなべて沖縄の教会ではプロテスタントを中心とした超教派のネットワークが力を付け出し、超教派の協力伝道が隆盛を極める。これは本土教会に見られない特徴であることは大方が認める所である。しかしそこに問題がないわけではない。沖縄の固有の民間信仰に見られるシャーマニズム的なものを飲み込んだような聖霊運動が90年代になって隆盛を極める。そういう中で必ずしもバプテスト神学校出身でなくとも各個教会では牧師招聘が自由とあって問題なしとしない。幸いにこの教会は初代牧師山路一、ポーリンジャー宣教師、3代牧師国吉守、4代目名護良健、現任牧師の藤田久雄と続いている。特に、4代の名護良健は教派の伝統にこだわりを持ち続けた。いわゆる超教派のネットワークに連ならなかった理由がその辺にあると思われる。バプテストとしてのアイデンティティーであろうと思われる。バプテストとしての自己理解なしにバプテスト教会としての教会形成はあり得ないからであろう。バプテストの信仰の主張として、1、信仰と生活の規範としての聖書、2、浸礼によるバプテスマ、3、新生者からなる会員、4、各個教会の自主独立—なにものにも支配されず、なにものをも支配せず、5、万人祭司主義、6、信仰と良心の自由、7、魂の自由、8、個人的な聖書の読み、解釈の自由、9、会衆主義による教会政治、となる。その自らの自己理解の上に立っての福音宣教であり、協力伝道であり、世界宣教でありたいものである。

2 開拓の教会

この教会はいつ開拓されたのだろうか。1955年（昭和30）7月である。そのころ一人の姉妹が照屋寛範牧師の伝道再開間もない那覇教会（当時、戦前の旧敷地に復興資金借り入れて牧師の住宅兼仮会堂として使用していた）の礼拝に出席していた。あの交通の不便な時代である。それをかねて照屋牧師は見かねて、「普天間で礼拝できるようにしたいね」と志してを立てておられて、「普天間で伝道しようか」ということになっ

たらしい。これが普天間教会開拓のきっかけであった。そのころ沖縄伝道支援のためにとボーリンジャー宣教師が本土から神学校卒業間もない山路一牧師を同伴しておられて、嘉手納、安慶名、泊、などの開拓と兼任のかたちで普天間開拓伝道に当たることとなった。当初は近くの学校の音楽教室での集会であったが、その後、近くの禰覇商店のトタン屋の一棟を借り受けての集会となる。当時の伝道活動は宣教師、牧師たちの働きは勿論であるが、信徒の働きが大きかった。中でも当時、民政府勤務の大河原健二郎夫妻の友人でもある山路牧師の働きとあいまって目に見るものがあったと言えよう。正に信徒の教会の面目躍如であった。当事者の新里信姉と大河原兄の証言に委ねるが、大河原兄は特に青少年伝道に活躍され、開拓時代の教会は活気にあふれていた。「種蒔き会」というのが結成され、機関紙「たねまき」を発行するほどであった。今ここにその2号がある。1961年5月発行である。一面には国吉守牧師の「使命に忠なれ」という奨励があり、メンバーによる文章、英語賛美歌紹介、ニュースとして、北中城村渡口の海岸でのバプテスマの記事、文芸欄、クイズまである。編集したのは伊佐南美子、新里郁夫、宮城輝仁、安里昭子、平良節子姉などの名前が見える。

1955年11月には9-12日と普天間での第一回伝幕伝道集会が早速開催されている。こども会を山路牧師が担当、大人のためには伊波盛次郎牧師とボーリンジャー宣教師、それにアメリカ軍チャプレンのパーク大尉とスピッパ軍曹による映画上映があった。これは伝道所のスタートと重なる。伝道所のスタートは1995年10月、当時中学校だった現普天間小学校の音楽教室であった。当時の校長先生の肝入りであったという。公共施設での伝道はあのころどこでも自由にやられていたようであるが、今日的視点からすると想像も出来ないであろう。

さて、週報の第一号発行は1956年6月3日の主日である。手書きで礼拝プログラムだけという簡素なものである。山路牧師が「感謝のうた」と題して、詩編136から説教している。そこには来る10日に大山海岸でのバプテスマ式あり、と予告されている。ちなみに第一回バプテスマ式は1956年6月24日に泡瀬海岸で行われている。司式者はボーリンジャー宣教師で、前原教会と合同で、伊波吉子姉がバプテスマを受けられた。1956年7月山路牧師が沖縄から離れる事になり、後を国吉守牧師が担当することとし、集会場所が今までの音楽教室から普通教室へと移動した。そのころ国吉牧師とともにボーリンジャー宣教師も協力することとなった。

1957年4月、ボーリンジャー宣教師が休暇帰国され、替わって、シュワルツ牧師が担当となる。通訳に大河原健二郎兄が活躍することとなる。同年3月にはいよいよ会堂建築へ向けての動きがあり、新里信姉、大河原健二郎兄を中心に土地購入のための準備委員会がスタートした。後に、現会堂用地が地主のご理解もあり、購入出来る事になる。1957年10月19日、伝道所として第一回の教会総会が開催された。初の役員として、新里信、古波蔵トヨ、桃原静、伊波吉子、石井リカ、大河原操姉が選任されている。第一回役員会は11月24日に開催され、そこで教会組織の件が議題となって、いよいよ教会組織へと始動しているが、そこでは保留となっている。

1958年7月6日、念願の教会組織会議が開催された。大切な場面なので式次第を掲げよう。

普天間バプテスト教会設立式次第

1958年7月6日午後3時

司式国吉守牧師

6. 黙祷

1. 賛美歌 534

1. 式辞

1. 開会の祈禱

1. 聖書 エペソ1章17-23節

マタイ16章13-20節

1. 設立経過報告ラッセル・シュオーツ牧師

1. 牧師の就任

1. 役員の就任

1. 教会設立宣言

1. 問安祝福の辞 伊波盛次郎牧師

1. 教会設立の祈禱 ラッセル・シュオーツ牧師

1. 牧師と教会に対する勧告 照屋寛範牧師

- | | |
|-------|----------|
| 1. 献金 | |
| 1. 独唱 | ニコルソン夫人 |
| 1. 祝辞 | |
| 7. 頒栄 | 541 |
| 1. 祝祷 | ニコルソン宣教師 |

いよいよキリストのみ名による一つの教会の護生である。若い力と福音宣教への情熱に燃えたスタートであった。福音宣教への情熱と言うのは、1958年ころには定期的な街頭での路傍伝道会が実施に移された事がある。他に平松伝道、天幕伝道、照屋寛範牧師特別伝道と盛んに伝道会が開催されている。開拓の教会はまさに若い力にあふれていた。

明けて1958年1月13日、連盟による聖書学院が開校し、当教会からも与儀真徳、喜屋武隆治、宮城宏吉、城間政子、米須敏子、仲座京子、大河原夫妻が入学した。4月1日付でシュオーツ牧師が帰国することになり、国吉守牧師が専任となった。暫く無牧の期間があり、待望の専任牧師の就任であった。

1960年2月7日教会組織後の第一回教会総会が開催されたが、ちなみに議題を次にあげて置く。

1. 教会規則作成の件
2. 個人伝遣の件
3. 会堂建築準備委員選出の件
4. 会堂建築特別献金の件
5. 保母学生推薦の件一米須敏子姉を推薦する
8. その他

1961年3月25日、会堂建築がいよいよ着工、5月21日には完工した新礼拝堂で初の主日礼拝が捧げられた。礼拝後には教会あげての感謝会も催されている。国吉牧師一家も真新しい牧師館に那覇から転居された。献堂式は7月2日午後2時、新装なった礼拝堂で宜野湾村長はじめ連盟諸教会から多数の列席者を迎えて喜びと感謝の内に行われた。次に当日のプログラムをあげる。

司式者 国吉守牧師

1. 奏楽 大河原操
2. 頒栄539
3. 主の祈
4. 独唱 金城節子姉
5. 聖書朗読 歴代下6:1,2,18-21 白井貞之進
6. 献堂の辞並祈禱 国吉守牧師
7. 賛美歌 210
8. 説教 ボーリンジャー宣教師
9. 賛美歌 191
10. 献金
11. 感謝 新里信姉
12. 記念品贈呈 宮城條善
13. 経過報告 大河原健二郎
14. コーラス 有志
15. 来賓祝辞
16. 会員代表謝辞 安里昌光
9. 頒栄 541
10. 祝祷 伊波盛次郎牧師

献堂式には160名余の出席者があって賑わった。満堂にお客があふれ、座席は勿論記念品、茶菓も不足し、まさに嬉しい悲鳴とはこのことであった。記念品には琉球漆器の聖句入り壁掛けが用意された。

1961年7月10日、伊波吉子姉が沖縄教会青年代表の一員として「アジア青年バプテスト大会出席のため上京している。

3. 自給教会を目指して

その頃の教会の伝道活動状況を第9回役員会記録から見てみることにしよう。

1961年9月24日のものから。

出席者：国吉牧師、新里信、桃原静、伊波吉子、古波蔵トヨ、大河原夫妻

1. 会計報告一会堂建築関連の報告あり、

2. 伝道計画として、

◆グループ伝道の検討

◆会員増加の方法の検討一路傍伝道、ボランティア伝道など

◆貧しい人達への配慮をする一衣料、金銭などどちらでもよい

などと協議されていて、当時の、伝道活動の一端をうかがうことができる。1961年10月31日、戦前の首里バプテスト教会牧師高里良薫氏(当時文部省勤務)の来沖を機会に、沖縄初の「宗教改革記念講演会」が那覇中央教会で開催されている。高里氏は戦後は文部省にありながら、戦後の沖縄のバプテスト教会復興のため物心両面からの側面的援助をしたことでも知られている。

教会ではその頃、規約作成準備に取り掛かり、委員会が発足した。現宗教法人規約の基礎になったものである。1962年のことである。5月20日の臨時総会で名護良健氏(西南学院神学部卒業)を副牧師として招聘することが決議された。5月27日には歓迎会を開催、6月10日には処女説教がなされている。わずか15分という短さに会員は呆気にとられた。(のちに出版された「説教沖縄」参照)。同年11月4日には名護牧師が首里教会会員の知念タケ姉(名護牧師首里高校後輩)と照屋寛範牧師司式、渡真利文三牧師仲介によって那覇教会で結婚式を挙げている。当時、珍しく会費制で披露宴が会堂で大河原健二郎兄の司会で催された。当時\$ 0.50の会費であった。

先に書いたようにその頃の伝道活動は活発で、幻燈会、連盟主催による奉獻精神高揚運動チーム、橋本巽特別伝道、平松伝道、などと相次いで開催されている。ミッション・マインド旺盛な時代ではあった。教会では名護牧師就任を機会に礼拝時間が午後から午前に変更されている。これは会員念願のことでもあった。1962年9月16日の役員会では保育園の設置が議題にされた。

1963年1月20日、国吉守牧師が内地留学のため主任牧師を辞任することとなり、後任には名護副牧師が同日就任している。その総会では保育園設置のため会堂二階増築が決議されている。また平良節子姉の関東学院神学部推薦も承認された。当教会初の献身者であった。代務牧師にはボーリンジャー宣教師が就任した。3月には国吉守牧師の送別野外礼拝が恩納村真栄田岬で持たれた。いよいよ教会は名護新任牧師の時代を迎えて、新しい教会形成を目指すこととなったのである。活発な伝道活動を推進した前任の国吉牧師と違い、新任の名護牧師はどちらかと言うと、地味な伝道活動に終始したと言える。特に、大学での歴史専攻ということもあり、「歴史を担う教会」ということが念頭にあり、そのことはキリスト教倫理専攻のW.T.ランドール宣教師が協力牧師に就任することによって益々拍車がかかったと言えよう。この辺のことは後に触れるであろう。教勢はと言うと、ほとんど横ばい状態である。もちろん伝道活動の停滞はなく、宜野湾地区での米須家集會、新生運動への参加、教会学校大山分校の開設(伊佐氏宅)、金田伝道、沢野正幸日本バプテスト同盟主事による伝道、西南学院神学部大槻国彦神学生による働き、教団西原教会新川広子牧師による集會と結構この年も盛んな伝道活動が展開されてはいる。そうした伝道活動がなかなか教会形成へと繋がらなかったのであろう。

1964年に入り1月にはバプテスト同盟の斎藤久吉理事長、沢野正幸主事、関東学院チャプレン大島良雄、同短大相川高秋学長、捜真教会千葉勇牧師の先生方が当教会を問安された。同年よりいよいよ教会は沖縄連盟の補助を返上し、自給態勢に入った。自分の足で歩くことになった。その志やよしとすべきか。さらに4月5日には待望の付属緑ヶ丘保育園の第一回入園式が行われた。園児4名でのスタートであった。同年6月には教会が育成団体となり、団長名護牧師、隊長亀川康雄兄の態勢でボーイスカウトが結成されている。12月の20日の教会主催の初の「市民クリスマス」の試みがなされて実施され、山田真山画伯と琉大教授で首里教会会員の成田義光氏がゲストとして招かれ、成田氏がクリスマス・メッセージをしている。しかしこれはこの試みは一回で終わっている。10月には「宗教改革記念講演会」が当教会を会場にして催されたが、これも一回限りで終わった。これは超教派のもので名護牧師も講演者の一人であった。

1965年3月27日には付属保育園の第一回卒園式が行われた。卒園生一人のひっそりしたものであった。この月にはボーイ・スカウトに続いて、ガール・スカウトが結成された。団長名護牧師、リーダー伊佐南美子

姉でスタートしている。またこの年から礼拝に韓国軍将校たちが出席するようになった。多い年は10数名も出席した。彼等はアメリカ軍基地での訓練への参加者であったようだ。その後の交流は途絶えたが。

4. 自給の教会

いよいよ教会は自給の教会時代となった。1967年4月31日、名護牧師の「按手礼会議」が招集された。いよいよ授按牧師の誕生であった。口さがない信徒の一人は「いよいよ名護先生も本物の牧師ですね」と言ったものである。そして9月7日、初の「主の晩餐」、同年9月7日には名護牧師初のバプテスマ式が執行された。9月にはW.T.ランドール一家は神戸に上陸している。この頃には教会の事務のOA化が始めて導入され、手始めに和文タイプを購入した。

前後するが1967年総会は1月29日に開催されたが、名護牧師の牧会報告を見てみると、教勢の数量、内実論議でなく、両面から考えたい、と言い、前年度のバプテスマ数の減少を取り上げている。そして年間のバプテスマ目標5名、礼拝出席40名目標を打ち出している。その後11月の役員会には教勢発展のための中長期的伝道計画の策定が総務執事、教育執事を中心に進められる事が協議された。1968年4月28日、当教会開拓のきっかけを作られたバプテストの重鎮であられる那覇教会照屋寛範牧師が召天された。名護牧師が同じ首里人として公私に亘ってご指導頂いた方でもあられた。

1969年度の総会が1月26日に開催されたが、教会への訴えで、名護牧師は「キリストの教会は内にはキリストの体にふさわしくならんことをつとめ、外に向かつてはこの世の歴史形成へと参与し、もってキリスト者としての生き方が正されるようにしたい」と訴えておられる。そして「礼拝出席厳守」「最善奉獻」「十一献金」が強調されている。また目前に迫った会堂増築について「福音伝道の新しい展開の拠点」と位置付けし、信徒の奮起を促している。ちなみに当時の教勢は礼拝出席30名、前年度のバプテスマは3名であった。同年3月には保育園の認可申請を琉球政府文書学事課に申請しているが、宗教法人登記未了ということで保留になっている。その後、本土復帰直前になって、認可したいので改めて申請するように、という連絡が入ったが、名護牧師の内地留学時期と重なったために、申請はしなかった経緯がある。6月18日、ランドール宣教師一家が神戸での日本語研修を終えていよいよ沖縄へ赴任しておられる。8月24日二階増築が完工し、使用を始めた。9月には宗教法人の認可、登記が完了した。10月12日には献堂式が執行された。

1971年2月21日沖縄赴任されたランドール宣教師が始めて当教会を来訪され、礼拝奉仕をされた。ランドール宣教師との関わりの始まりであった。

本土復帰直前の様子について見よう。1971年度教会総会で名護牧師は語る。「復帰前年の不安と期待のなかにある教会は何をなすべきか」。しかし当時沖縄の教会はおしなべて復帰運動については静観の態度であったように思う。もちろん復帰待望はみんな持ってはいたであろうが、例えば、名護牧師もそうであつが復帰行進に参加したり、デモに参加したり、またハンガー・ストに参加したりというのは、一部の教会人であったように思う。名護牧師は積極的に市民運動に関わったのであるが、その思いには「歴史を担う教会」を目指すということがあつた。では名護牧師は何故にあれだけ待望した本土復帰の年にあえて内地留学を決断したのであるか。いくつか理由があつたようであるが、亡き照屋寛範牧師に牧会に疲れたら学校でも行きなさい、とかつてアドバイスを受けていたことと、個人的に言えば、復帰の歴史的出来事を外から見てみたい、という思いがあつたようである。

1972年3月の臨時教会総会で名護牧師の内地留学は承認された。

名護牧師は3月21日、家族を那覇の実家に残して同志社神学部留学のため大阪へ向かった。留守はボーリンジャー宣教師にお願いし、保育園代務園長は渡真利文三牧師にお願いすることとした。明けて1973年3月、名護牧師は帰任した。当初、普天間教会は留学を機会にして辞任することにしていたのであるが、金武教会からの招聘を頂きながらまた普天間教会へ戻って来ることになった。また1975年には小禄教会赴任の動きもあつたが、結局伊波盛次郎牧師が就任して決着した経緯がある。小禄教会はかつて開拓時代に名護牧師が1年にわたって関わった経緯がある。しかし同年6月には教会の承認を得て小禄教会の代務牧師に就任している。これは翌年の6月までであった。

1976年保育園分園開設と開拓伝道の新しい拠点とすべく6月には建設委員会が設置されて始動している。明けて1977年3月に園舎起工式が執行されている。この働きは当時勤務していた会社を退職、当時、運行を始めた通園バスの運転手として奉職していた信徒の末吉重昭兄、初子夫妻を中心にした動きであつたが、当時、勿論教会あげでの動きでもあつた。それには後に協力牧師として迎えらるることになるランドール宣教師も加えた「コイノニア・ハウス」構想へと発展する。この構想は壮大なもので開拓伝道と同時に二つの大学が近くに来る事になって留学生のための施設建設まで構想されていた。当面はランドール宣教師による夕礼拝が持たれることとなった。

5. 歴史を担う教会—揺れる教会—

1977年5月、教会ではCS教師就任式と共に首里教会から移籍されたランドール宣教師の協力牧師就任式が行われた。早速ランドール宣教師は1978年10月には「コイノニア・ハウス」での働きを始めた。開拓伝道所の始動であった。前後するが8月には名護牧師、ランドール宣教師は、連盟大学伝道の一つの働きとしてのタイ国ツアーに出ておられる。

1979年10月26日、教会は「宣教25周年記念礼拝」をしている。これには名護牧師神学校恩師でもあられる日本伝道会主管の渡辺暢雄牧師を迎えて記念伝道会が持たれた。

さて1978年の年末から未だ表面化したわけではなかったが、いわゆる「ランドール宣教師事件」が始まった。後にこのことを巡って名護牧師はじめ教会は問題の渦中のなかに揺れることとなったことは未だ記憶に新しい。連盟の公刊された歴史書では明らかにされなかったが、これは教会史というこもあり、すべてというわけにはいかないかも知れないが歴史の事実として記録にとどめることにする。そして後世の歴史の判断を受けたいと思う。

事の始まりは、ランドール宣教師がアメリカ・ミッション・ボードによって解任されるらしい、ということとを先ず名護牧師が察知したことに始まる。この経緯は同じ教会の同労者として当然のことと考えられる。先ず名護牧師からボード宛ての次のような事の真相についての問い合わせの書簡に対して、ボードからの返信が届いた。名護牧師の書簡はあらまし次のようなものであった。1979年3月25日付。

1. 宣教師の任免の手続きの問題—現地教会との相談はないのか。

2. ランドール宣教師を中心とした「コイノニア・ハウス」—幼児保育施設と開拓伝道の拠点とする働きにランドール宣教師を任命したばかりであること。

その書簡に対して、1978年4月11日付でAlice M. Giffin 女史（当時ボード沖縄フィールド責任者）から返信が届いた。その要旨は、1. 宣教師任免権はボード側にあるが、現地教会のリーダー達との協議—相談の上でのことであること。

重要な事実として分かった事は、当時の沖縄連盟の理事長はじめ特定の指導者がランドール宣教師解任の相談にあずかった、ということであった。そのことの是非を巡って、沖縄連盟理事会、牧師会、普天間教会は揺れることとなるのである。そういう経過を受けてランドール宣教師を支援しようという牧師達が立ち上がることになった。即ち、城間祥介牧師（宮古教会）、当山武牧師（親慶原）、饒平名長秀牧師（神愛教会）、横田盛永牧師（金武教会）に名護牧師である。同年8月1日付で「信仰と良心の自由のために」—ランドール宣教師問題に関する声明—を発表した。A4版の14頁に亘るものであった。これら有志牧師は「信仰と良心の自由を守る有志の会」（事務所：普天間教会内）を結成し、広報活動と支援活動を開始した。当時この文書は反対側によって「世界中にばらまかれた」と批判された。身内の恥じを世界中に晒したということと言いたかったのであろうか。しかし反対側も早速この有志の声明に対して有志牧師達の署名入りの「反声明」を出して対抗してきた。

一方渦中の教会の対応であるが、その問題の最中に名護牧師が辞任すると言い出したので紛糾した。結局一旦辞任し泊教会専任となり、牧師館を出て首里へ転居、しかし1981年名護牧師は代務牧師としてとどまることになった。兼牧状態の継続である。1982年6月4日連盟から理事長他3名の理事が教会を来訪し、役員会との当面する問題についての協議がなされた。それを受けて教会は臨時総会を開催し、集中的にこの問題を協議することとした。その模様を次に記す。

先ず臨時役員会を開く。

10月20日午後8時15分。会堂にて。出席：名護牧師、ランドール宣教師兼協力牧師、新里信、桃原静、末吉重昭、高木正雄、知花喜子。

◆連盟がランドール宣教師の協力牧師身分を問題にしている—これは教会の問題である。

◆ランドール宣教師の前田宣教師館に解任後も入居を続けているのは普天間教会の責任でもある—これは筋違いである。

これを受けての10月31日の臨時総会の模様はあらまし次通り。

議長：高木正雄 書記：石川博美

議長が連盟からの書簡読み上げる。

書記が先の臨時役員会の議事録を読み上げる。

◆2、3年も引きずっている問題であり、そろそろ和解することです。

◆宣教師館明け渡しの問題は教会の問題ではないのではないのか。

◆協力牧師身分については問題はない—議事録あり。

◆連盟を取るかランドール先生を取るかですね、ランドール先生を取ります。

こうした経過をふまえて1982年11月1日付で教会は連盟当てに次のような返信を送付した。

沖縄バプテスト連盟理事長殿

先に貴理事会よりの書簡について、その内容の重要性に鑑み、教会法人規則の手続きを経て臨時総会を開催し、「ランドール師の当教会協力牧師身分」について改めて追認しましたのでご通知申し上げます。

1982年11月1日

宗教法人普天間バプテスト教会

総会議長 高木正雄

書記 石川博美

代務牧師 名護良健

さらに11月23日、連盟理事長他2名の理事が教会に来訪し、この問題についての協議が続いた。その協議は開けて7月20日に続いている。

そうした経過をふまえて1983年4月29日－30日の沖縄連盟第3回年会の5号議案宣教師館明け渡しに関する件、協議中その余勢をかって普天間教会除名すべし、の声が上がった。これは連盟の歴史始まって以来の前代未聞のことであり、議場は賛成、反対入り乱れて紛糾した。結局、教会除名は慎重にも慎重であるべし、という声があり、未了に終わった。そうした流れの中教会も揺れに揺れ、1984年1月8日には末吉重昭兄が教会牧師館に名護牧師を訪ね、末吉兄他12名の会員が自主退会する旨申出があり、協議した。当初「新生会」として独立し、後に宜野湾教会と称するようになる。これはかねて予想されたことでもあり、名護牧師始め教会では袂を分かつこととした。この時すでにこのグループは連盟有志牧師達の支援を受けて独自の家庭集会などを始動させており、予定の行動であったのであろう。結果論であるが一つの教会が生まれ出たわけである。それはそれとしてよしとすべきかも知れない。その際、読谷村の名護牧師の自宅を大河原健二郎、末吉重昭兄が訪ねて教会宛での感謝献金をしていることを付け加えたい。これを教会分裂と見るかどうかは評価の分かれる所である。

前後するが、前田の宣教師館でのことであるが、ランドール宣教師、沖縄連盟との協議のため来県したボードのギフィン女史と同席する機会があり、名護牧師が宣教師解任問題を切り出そうとすると、ギフィン女史が席を立てて宣教師館から退出しようとした。その時、ランドール宣教師がギフィン女史の背中から、「名護牧師は沖縄連盟だけではなく、沖縄のキリスト教会にも影響力がある人ですよ」と声を掛けると、ギフィン女史は何を思ったか取って返し椅子に座り直して、名護牧師の話に耳を傾けるという場面もあった。

1980年4月、本部町ホテル・オリオンでアメリカNCC、日本NCC、沖縄キリスト教協議会の共催で「日米教会協議会」が開催された。これは沖縄におけるアメリカ軍基地と沖縄の教会との関係について協議するものであった。アメリカ側からはアラン・ガイアー博士が「ミタリズムの神学的考察」と題し講演、沖縄側からは数名の牧師達がパネリストとしてディスカッションが行われたが、そこに当時渦中の人であったランドール宣教師が参加することになり、沖縄連盟内で論議を呼んだ。OCC代表がバプテストの理事会との協議に臨んだりしたが、結局、バプテストはこの協議会をボイコットすることとなった。さらにこのことが引き金になり沖縄連盟はOCC団体加盟を取り消した。これもしかし次の沖縄連盟年会ではOCC派と脱退を主張する側がきびしく対立したが、脱退賛成多数で押し切られた。

ちなみにこの協議会には他にバプテスト側からは饒平名長秀、名護良健牧師がパネリストとして参加している。

先に記した5人の牧師達による「守る会」は『和解』という機関紙を発行、広報にこれつとめたのであるが、何しろ多勢に無勢ということであった。しかし当時の沖縄キリスト教会で幅広く共感を呼び、あのグリーン・ブックは教会だけでなく多方面から引き合いがあった。今日でも大学の宗教学の研究者などからも引き合いがある。貴重な資料なのであろう。

6. 新しい歩みを

「宣教師問題」は決着がついたわけではないし、その真相は未だに闇の中である。しかし教会はともかくも一応の小康状態となった。ランドール宣教師による「コイノニア・ハウス」も一応その働きを終えることとした。その際、ロック・アウトされるという場面もあった。1984年に入り、教会の態勢を立て直すということもあり、伝道活動に力を入れることになった。竹内家では中学生のために「ピリポの会」が発足、6月には横田盛永牧師を講師にして「歌い語やびらメシア世界報」特別伝道会、11月には教会学校の特伝として「小学生集まれーゴスペル・コンサート」（教団与那原教会有志協力）と続いた。

この教会の特徴的なこととして「平和問題」「沖縄問題」の取り組みがこの数年前からは6月の「慰霊の日」を中心に「戦跡ツアー」を実施したり、また「カデナ基地包囲」行動への参加と積極的な取り組みがある。ま

さに「歴史を担う教会」の面目躍如というところであろう。

11月には城間祥介牧師を講師に「宣教30周年記念伝道」が展開された。宣教開始して30年—新たな思いで教会の託された使命に邁進しようとの決意をしたことであった。1986年11月には金沢文庫教会白根新治牧師と饒平名長秀牧師を講師に特別伝道会が開催されている。

1987年11月久し振りの「教会修養会」が開催されている。名護牧師、ランドール牧師、名護タケ、上里芳子、玉城正巳の諸兄姉が発題者であった。1988年4月に普天間、泊、親慶原教会合同による教育講演会をセミナー・ハウスで開催している。またこの年11月に現任牧師の藤田久雄兄が正式に転入手続きをして迎えられている。1989年になり1月にはいわゆる「真夜中の結婚式」—神谷武宏、伊是名明美—が挙げられたが、これは当時神谷兄のお父さんが危篤状態にあり、お父さんの命ある内にとという特別のはからいで実行されたものである。まさにこれは前代未聞のことであり、印象的な出来事ではあった。

11月5日、南風原伝道所の開所式が行われたが、これは古波津正則牧師を主任に、石嶺、泊、普天間教会の共同の働きとしてスタートしたものであった。かねて南風原町で名護牧師が家庭集会をした経緯もあって始められたものであった。3教会が古波津牧師を支援してのものであったが、1年ならずして古波津牧師の都合もあり閉鎖された。しかしいずれにしろ教会の伝道への取り組みとして注目して良い。その志やよしとすべしである。因みに古波津牧師は現在は仙台の福祉施設のチャプレンとして活躍中であることを付け加えておく。

1990年1月、教会で反靖国キリスト者連絡会主催の「大嘗祭どうなる？」集会が開催された。これは当時危篤状態にあった亡き昭和天皇のことを念頭においての集まりであった。まもなく時代は皇太子明仁が新天皇に即位し、元号も昭和から平成と変わった。

11月30日、名護牧師の「説教沖縄」が燦葉出版社（白井隆之）から出版され、宜野湾市中央公民館で教会関係の出版パーティーが開催されている。これは名護牧師兼牧する泊教会—現中城城東教会—の新会堂建築資金造成のためのものであった。前後して5月には名護牧師はアメリカのルサー・ライス神学大学の修士課程を終えて修士号を授与されている。因みに名護牧師の出版パーティーは高校同期生によるパーティーが那覇市でも前後して開催された。尚、中城城東教会の新会堂献堂式は1992年3月に執行されている。

1994年2月、藤田久雄兄がバプテスト同盟宣教研修所入学のため上京した。これは平良節子姉以来の教会としての献身者であった。教会では微力ではあったが人材育成資金をもって援助、教会あげて支援した。すでに名護牧師はこの時すでにひそかに後継として心積もりをしておられた。

7. 信仰の継承目指して

1994年8月、礼拝の交読文が新共同訳にかわった。これは将来の教会公用聖書の新共同訳への移行ということ視野に入れてのものであった。現在の時点で最も新しい翻訳ということがあるからである。教会とはいつもそうしたことに敏感である必要があり、いつも改革途上の教会であることはいままでもないであろう。

1996年6月、役員会は藤田久雄兄の神学校卒業を控えて、名護牧師の後任牧師として招聘することを内定している。そのための準備が進められた。11月24日、「宣教40周年」に当たり、視覚障害の比嘉信子姉、野田夫妻—天久神の教会—を迎えて記念の伝道礼拝を開催している。同時に付属保育園は創立32周年を迎えた。

1997年3月、名護牧師、神谷武宏兄が藤田久雄兄の神学校卒業式へ列席、金沢文庫教会礼拝で両人とも奉仕している。そして晴れの卒業式に列席した。名護牧師はある感慨をもって卒業式に臨んでいた。それは神谷兄も別の意味で同じであったろう。一つの教会にこれだけ長年に亘り在任できたというのは神の恵みというか、あわれみ以外のなにものでもなく、こうしてスムーズに後継に使命を託することが出来たというのは牧師冥利につきるというものであろうから。教会は名護牧師を最後の総会で名誉牧師に推挙、その長年の労苦に報いてた。4月、念願の納骨堂が普天間、中城城東教会共同で中城城東教会裏の墓地公園に献堂した。4月13日には納骨堂前で初のイースター後の記念礼拝と落成式を兼ねての記念式が営まれた。名護牧師は中城城東教会での新たな福音宣教の使命へと離任して行かれた。信仰の新しい継承を祈りながら。

（附記：本稿は、劈頭に起稿の日付があるように、教会40周年記念誌編集に際し、書き下ろされたものである。今回50年史編集にあたり、執筆者名護良健牧師の了解を得て、ほぼ原文のまま、掲載させていただいた。
編集者）

ウィリアム T. ランドール, 名誉牧師 と マキシム ランドール

普天間バプテスト教会 協力牧師 1977年5月1日から2000年3月31日

牧師 2000年4月1日から2007年9月30日

I. 初期の頃

マキシムと私は共にアメリカ合衆国の南部で育った。彼女はテネシー州で生まれ、私はジョージア州で生まれた。私達が初めて出会ったのは1952年、私は19歳で彼女は17歳であったが、私達には沢山の共通点があり、特にキリスト教に関しては顕著であった。私達は共にクリスチャンの家庭で育ち、幼少時には、南部バプテストの教会に通い、キリストへの信仰告白で教会員となり、共に若い時期にバプテストを授かっていた。

概して、私達が通っていたいくつかの教会は、海外宣教活動に参加することに重点を置いていた。すべての教会員は、祈りと献金を通して外国の宣教師の活動を支援することを奨励されていた。更に、私達若い人々は特にユースの交わり会などで、海外宣教活動に献身することを祈りの課題に含めることが日々求められていた。

II. 8月15日

8月15日に起こった2つの出来事は、宗教上の旅に強く影響を与え、最終的に私の立ち位置を聖書的な平和主義へと導いて行った。

1945年8月15日に第2次世界大戦は終わった。それは、世界がこれまでに知り得た最強の軍隊の勝利をアメリカ人が祝う日であった。その時、私は12歳、強力なアメリカ軍を心から誇りに思っていた。そして、第2次世界大戦の勝利は、イギリスの植民地支配を終わらした18世紀の独立戦争と同じ武勇の精神がもたらしたものであり、神がアメリカの軍事力の背後にいる究極の力であると信じていた。

1947年8月15日は、インドが独立した日であった。その日は、インドとパキスタンの人々がイギリスの植民地支配の終焉を祝った日であった。自由は軍事力なしで勝ち取りうることに私が驚嘆していたことを思い出す。更に、私は、マハトマ・ガンディーの非暴力主義は、主にイエスの山上の垂訓（マタイの福音書5-7章）に基礎を置いていたことにも同様に驚いた。

ガンディーの道徳上の勝利について学ぶことは、私の心に新たな疑問を投げかけた。私はその時まだ14歳であったので、明確にそのような疑問を表現することはできなかった。ただ、私は学校や教会でしみ込まされていた典型的なアメリカの価値に疑問を持ち始めた。つまり私が信じていた価値とは、人間の問題は力によって解決しうる、そして解決すべきであると信じた。その力とは、究極的守護人であり正義と自由の保障人であり、アメリカ独立戦争や第2次世界大戦の軍事的勝利に表されて来た優れた物理的力であった。しかし、ガンディーの公表された道徳の勝利は、私がこの軍事的考え方に疑問を持ち始めることを

引き起こした。

ガンディーの仕事や非暴力の教えに出会った後は、私は、増々山上の垂訓に引かれて行った。そして、垂訓全体を読み始め、繰り返し読みながら、これが私の人生にどのように関わっているのかじっくり考えるようになった。しかし、そのような熟考は、必然的に私のアメリカの価値観への執着との解決されない対立を生じた。

大学卒業後、アメリカ政府は 1955 年から 1958 年までの 3 年間兵役義務を果たすように求めた。一方、軍隊での訓練や活動は私のたくましくなりたいというエゴを満たした。しかし、同時に軍隊の‘殺戮機械’との厳しい対面は、信仰と倫理に関する 3 つの重要な課題があることを私の心にはっきりと示した。一つ目は、兵役はイエスの教えである汝の敵を愛せよとキリスト教の許しに矛盾しているという結論に至った。二つ目には、私達が訓練を受けている心理的、物理的暴力による方法では、個人的や国際的に関わらず、問題は決して本質的には解決されて来なかった。

三つ目には、福音宣教開始の神からの召命をもはや無視できないことを知った。実際、私は大学生だったころから感じていた召きと格闘し続けていた。1958 年に、私は、二人の息子である 3 歳のニックと 18 ヶ月トニーを連れて、南部バプテスト神学校への入学が許可されているケンタッキー州ルイビルに行った。マキシンは、南部バプテスト神学校と関係のあるカーバー・スクール・オブ・ミッション・アンド・ソーシャルワークで学び始めた。

III. 神学校時代

私達の神学校時代（1958 年 8 月から 1963 年 6 月）は、ヘブライ語の旧約聖書、ギリシヤ語の新約聖書、キリスト教倫理と哲学、教会史、体系的神学、牧師によるカウンセリング法、キリスト教教育、キリスト教宣教史、いくつかの関係講義の学びに費やされた。

また、この時期は、自分達の幼少や青年時に起因している疑問や問題に決着を付ける時期でもあった。第一に、自分のアメリカの世俗的な価値観と山上の垂訓との間にあった内的葛藤から解放されつつあった。つまり、ウィリアム・ハル博士の基での新約聖書の学びとヘンリー・バーネット博士の基でのキリスト教倫理の学びを通して、山上の垂訓はそれによって生きる為の真実であるという不可避な結論に導かれた。この真実は、私が完全に掌握することができるもの以上であることを感じた。とにかく、この真実への探求は、一生続くかもしれないものだった。

もちろん、アメリカの世俗的価値観とイエスの教えとの間の私の内的葛藤の解決には、多くの要因が関わっていた。一つ目の主要な影響はマキシンのとの会話から生まれた。それは、彼女がハーベルト・ギルモア博士の“別の社会システム”という授業を受講していた時であった。この会話の中から私達の中に生じた思いは、私の考えを一変させた。私は、それぞれの社会システムやそれぞれの文化、つまり、共産主義か資本主義か、社会主義か

自由市場の民主主義か、私達の知っているありとあらゆる何かは、基本的に人間が作り出した物にすぎないということが分かった。従って、それら一つ一つには、欠陥があり、且つ価値もある。

この件に関する結論は、文化的あるいは社会的価値は、絶対的なものではないことだった。結局、暴力の問題に関してイエスの教えを私の指針にする時、軍国主義は、欠陥が備わったシステムであり、私の人生では拒絶する必要のあるものであった。

第二にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師によって導かれた公民権運動が重要であった。この運動の頂点は、私達の神学校時代に訪れた。良く知られていることだが、キング博士は、ガンディーの教えの献身的な支持者であり、イエスキリストの忠実な弟子であった。キング博士と彼の導いた運動は、山上の垂訓の原則に基づいており、アメリカに広範囲に及ぶ変化をもたらそうとしていた。一つの結果は、アフリカ系アメリカ人と他のアメリカの少数民族の公民権が過去に例を見ない方法で保護され始めた。

キング博士は、たくさんの書物を書いた。特にその一つの“汝の敵を愛せよ”は、私に強い影響を与えた。これは、山上の垂訓を基に書かれた説教集であった。私にとって、キング博士、彼の働き、そして彼の執筆物は、イエスの教えの生ける力が表れた例となった。

第三に、南部バプテスト神学校での実生活の際立った特徴は、世界伝道と弟子が世界の至る所で福音を述べ伝える義務への日頃からの重視であった。宣教師によるチャペルでの説教を含む海外宣教を重視する定期的なプログラムがあった。神学校時代のすべてで、マキシムと私は神が私達に海外宣教の仕事に召しているかもしれないと強く感じていた。私達は、良く祈りつつ海外宣教のために自分達を神にささげた。そして正式に、私達がアメリカン・バプテスト海外宣教協会(ABFMS)の宣教師候補になった。私達がアメリカン・バプテストに引かれたのは、彼らが、宣教師を海外での仕事の管理者あるいは監督者ではなく協力者としての役割を強調していたからである。

振り返ってみると、南部バプテスト神学校に来る前までは、自分が“アメリカ人のクリスチャン”であったことに気づく。しかし、私達が過ごしたこの年月での経験を通じて、私は“クリスチャンのアメリカ人”になった。これは、私があらゆる社会的、文化的価値観を超えてイエスの教えを自由に優先させられることを意味した。一方、マキシムは、私よりも早く同じ結論に達していた。

後の1966年に私達がアメリカン・バプテスト海外宣教協会の宣教師として指名された時、私達は過去を振り返りながら、神が、私達が出会うときの前から二人の人間としてキリストに使えることを準備し、しかし、一つの精神と心で海外福音宣教に私達の人生を導いてくれたことに感謝した。

IV. ヴィエナ・バプテスト教会

私達の神学校時代の1960年から1963年まで、私はインディアナ州スコッツバーグのヴィ

エナ・バプテスト教会の牧師を務めた。その教会は南インディアナの小さな田舎の教会で、ルイビルから北に車で45分ほど走った所にあった。この地域の多くの小さい教会と同様に、この教会の歴代牧師のほとんどが神学生であった。このヴィエナで牧師を引き受ける前に、私は、マキシムと出会ったジョージア州マリエッタの教会で按手を受けた。

私達がここに居た3年間に、私は説教や牧師による短い訪問の仕方を学び始めた。この他にも、日曜学校教師の指導や結婚式や葬式を執り行うといった、たくさんの牧師の仕事を学ばなければならなかった。

ヴィエナの教会員は、経験不足の若い牧師達に慣れていたし、また私達に対して忍耐強かった。執事達はいつでも相談相手になってくれたし激励の源ともなっていた。何よりもヴィエナ・バプテスト教会は私達を迎え入れ、宣教師になるという私達の一生の決断を支持してくれた。いかなる事であろうとも、私達の牧師と宣教師のルーツを見つけられる教会のことを忘れることはない。

V. エレッツヴィル・バプテスト教会

神学校卒業後まもなく、私はエレッツヴィル・バプテスト教会の牧師に招聘された。エレッツヴィルは、インディアナ大学があるインディアナ州ブルーミントンの郊外にある。私達は3人の息子（ウエインは1963年1月に誕生）を連れて1963年7月にここへ引っ越した。1966年に宣教師として任命されるまでこの教会で奉仕した。エレッツヴィルでの3年間で4つのことが思い出される。

第一に、エレッツヴィル教会には、たくさんのインディアナ大学の学生が教会員として、あるいは求道者として来ていた。彼らや大学との関わりを通じて、私達は大学（宣教）での特別な霊的な必要性を自覚するようになった。そのために神が私達をキャンパス奉仕に導いてくれたのだと感じた。

第二に、エレッツヴィル教会は、伝統的に地区、州、国のバプテスト会議の仕事に積極的に参加していた。教会の代表として、私達はABFMS（アメリカンバプテスト海外宣教協会）の全体の働き、特に海外での働きについて、短期間で精通した。

第三に、宣教師の妻は、大学教育を受けていなければならないというABFMSの条件を満たすため、マキシムはインディアナ大学に入学した。彼女は私達が宣教師として任命される前に、3年間の教育を終了していた。（彼女は後にニューヨーク市にあるコロンビア大学に編入し、文化人類学の学士号を取得して卒業した。）

第四に、この3年間でアメリカに大きな変化が起こった。一方では、非暴力と正義が空前の頂点に達していた。マーティン・ルーサー・キング Jr.牧師は、1963年8月にワシントンD.C.で世界的に有名な“I Have a Dream（私には夢がある）”というスピーチを行った。そして、彼は1964年12月に彼の非暴力公民権運動に対してノーベル平和賞を受賞した。国民の間に平和と協調に対する大きな希望が広がっていた。

逆に、暴力と軍国主義の勢力がアメリカ合衆国と太平洋に広がり始めていた。ジョン・F. ケネディー大統領は1963年11月に暗殺された。そして、L. B. ジョンソン副大統領が大統領となり、国を二分した道へと導いて行った。他方、彼は積極的にマーティン・ルーサー・キングの市民権闘争を強力な法的政策によって支援した。しかし同時に、合衆国のベトナム対立への介入を急速に深めていった。

ベトナム戦争が激化すると、それに対する反対運動がアメリカ全土に広まった。編目状のアメリカ社会は、戦争に対する裁断により脅かされていた。私達は積極的に東南アジアでの戦争に反対した。私達の抵抗は、非暴力というイエスの教えに対する信仰と不正義に対しては声を上げる義務があるというクリスチャン市民としての信念に基づいていた。

VI. アメリカンバプテストの宣教師

1966年にABFMS（アメリカンバプテスト海外宣教協会）により私達は海外宣教師に任命された。私達は第一希望の地である東北インドで奉仕し、一般宣教師として西ベンガルのイジュリ大学の学生宣教をすることになっていた。そして、ビザ申請を行い、回答を待っている間、ニューヨーク市から北へ数マイルの所にあるニューヨーク州ストーニー・ポイントにある国内教会協議会の宣教師オリエンテーション・センターで宣教師研修を受けた。

その研修終了後、そのままオリエンテーション・センターにとどまり、ニューヨーク市のコロンビア大学で授業を受け始めた。私達は二人ともヒンズー語を勉強し、マキシンは人類学の勉強を続けた。私は南アジア研究を受講した—その大学院セミナーには、南アジア研究科長で、以前インドで宣教していたメゾジスト派の元宣教師アンスリー・エンブリー博士の「マハトマ・ガンディーの生涯と業績」が含まれていた。私達は、ビザ申請の回答を待ちながら、これらの勉強に一年を費やした。

1967年の初夏、ABFMSからインド政府が私達のビザを発給しなかったことを知らされた時には、実に落胆させられた。宣教協会は、私達が沖縄バプテスト連盟（Okinawa Baptist Association: OBA）からの学生宣教と一般伝道のための要請に応じて、沖縄に行く事を提案した。

私達には、その提案に対して強く反対する理由が二つあった。一つ目は、沖縄を占領している米軍基地から東南アジアでの戦争が遂行されているのを知っていたこと。つまり、私達は良心に従って、合法的なあらゆる手段で、戦争や基地に対する反対を余儀なくされるだろうと思われた。二つ目は、それまでに、そのような巨大な外国軍の駐留が沖縄の社会構造や文化を既に破壊してしまっているだろうと感じたこと。

私達は、ABFMSの海外宣教部長であるジェームス・スプリングス博士と日本・フィリピン担当主事であるラッセル・ブラウン博士に相談し、そのような反対理由を説明した。彼等は共に、戦争や軍隊による占領に反対することはクリスチャンの良心に属することがらであって、何ら問題はないと保証した。

私達は同意して、最初の2年間語学研修のために神戸に送られた。1967年9月1日に東京に着き、私達は翌日語学研修を始めるため神戸に移動した。

VII. 神戸

私達が神戸にいた1967年9月から1969年6月までの2年間は、日本語の習得を第一にすべき仕事とした。しかし、京都や奈良など日本の各地を訪ねて、日本の文化遺産的なものも学んだ。また、関西の日本バプテスト同盟に属する教会のいくつかは、まだ私達が規定の語学研修を受けている段階であるにも関わらず、私が訪問して日本語で説教するように招聘した。

私達は1968年4月に初めて沖縄を訪問したが、それは驚きの連続であった。最初に泊港で下船し、ハイウェイ1号線（現国道58号線）を北上したときのことだった。私達は米軍基地の広がりには驚き、愕然とした。もちろん、私達は軍隊の存在を既に知ってはいたが、膨大なスケールの基地や騒がしい艦船、航空機、ヘリコプター、トラック、戦車、軍隊の動きなどの現実に対して全く準備ができていなかった。それらすべてはベトナム戦争に直接関係していると私達は思った。

更に、私達はアメリカ人社会と沖縄人社会の間にある明らかな経済格差のために悲しくさせられた。この経済格差は沖縄に対するアメリカ合衆国による継続的占領の不当性を如実に表していた。それは占領が16年前に終わり、経済と戦後の社会復興が急速に進んだ関西と際立った対照をなしていた。

また、私達のためにバプテスト宣教師団体（B. M. フェローシップ）が主催した歓迎会に出席した時に、別の驚きに遭遇した。第一に、教会あるいはレストランなどで行われるであろうと思っていた自然な期待に反して、それは米軍基地内にある将校クラブで行われた。更に、私達に挨拶した集団には、南部バプテストやアメリカン・バプテストの宣教師ばかりでなく、複数の従軍牧師や実戦部隊の兵士が含まれていた。

後に先輩の宣教師に歓迎会での私達の驚きを伝えた時、その宣教師は、彼ら軍人や彼等が所属する軍隊の部隊やチャペルが沖縄バプテスト連盟（OBA）の宣教活動に多額の財政的援助をしていることを説明した。更に彼は、時々彼等の一部が通訳を通して説教を行い、沖縄の教会を助けていると言った。つまり、彼等は宣教師集団の一部であると見なされている、と彼は説明した。そして、宣教師の集まりは度々、軍隊のクラブで開催されていると言った。

一方、私達が会ったバプテストの牧師達や信徒のリーダー達のうちには、数こそ少ないが、霊的に強い平和運動が沸き起こっていたことを知り喜んだ。彼等は沖縄の経済的、政治的、社会的な公正を積極的に求めていた。彼等は、米軍による自分達の島の占領やベトナム戦争に反対していた。更に、彼等の平和に対する強い責務を目の当たりにして感心した。

最も重要なこととして、沖縄のバプテストに集う人々が生き生きし伝道に熱心であることと、そしてバプテストの力強いキャンパス伝道を発展させることの必要性和機会の両方が整

っている事を発見し、私達は大喜びした。そして、沖縄は聖書のメッセージを素直に受け入れる人々がいる土地であり、地理的に言っても、この島はアジアと太平洋地域全体の伝道活動をするのに理想的な場所に位置しているように思われた。神様が私達に沖縄で奉仕するよう導いてくださったのだと、私達は実感した。

VIII. 沖縄での宣教開始

1969年6月に私達は沖縄に移り、学生宣教と一般の伝道活動を開始した。到着後まもなく、私達は、首里バプテスト教会員で琉球大学学生の宮城幹夫さんと交わりを持った。(当時琉球大学は首里にあった。)彼は、学生聖書研究グループを設立したいという真剣な熱意を示した。そして、沖縄バプテスト連盟宣教委員会の名護良健牧師(当時議長)と首里教会の城間祥介牧師の協力を得て、1970年に私達は大学生の聖書研究、交流、そして宣教を目的としたロジャー・ウィリアムズ・フェローシップを設立した。宮城幹夫さんは初代の代表となり、私は顧問となった。

新しいグループとして「ロジャー」が、直ぐにニックネームとなり、初めは首里教会で集まっていたが、その後キャンパス内にあったキリスト教学生センターに移った。那覇バプテスト教会員であった琉球大学の数学科教授呉屋永徳さんが、大学の彼のオフィスで集まれるようにロジャー・グループを招待した。

ロジャー会員はしばしば夜会を行い、私達の自宅でそれらの会合を開いた。学生達は夜が更けるまで歓談した。それは自宅だからこそ出来たことであった。この習慣は後に「ランドール・オープン・ハウス」へと発展して行った。オープン・ハウスでは、私達の居間が毎週土曜日に学生達に開放された。学生は自由に来て彼等が話したい話題について自由に議論をした。オープン・ハウスは、彼等が定期的に来て参加することで、彼等の要求を満たし、1986年半ばまで続いた。

私達は沖縄での奉仕の初期から一般伝道活動にも関わっていた。私達は首里バプテスト教会員で私は教会役員でもあって、しばしば説教するように要請された。また、早くから沖縄バプテスト連盟のそれぞれの教会で説教をするように招聘されたので、第1任期中に皆と顔見知りになった。

更に、宮古島で働いていた横田盛永牧師と久米島の饒平名長秀牧師を補佐した。私は離島伝道の特別な挑戦に精通して行った。

IX. 米軍占領下の沖縄における教会と社会

復帰運動は私達が沖縄に着いた1969年には頂点に達していた。また、沖縄人はベトナム戦争に強く反対していた。私達を含む沖縄での生活すべてが復帰運動とベトナム反戦運動により大きく影響された。

そしてほとんどの学生がこれらの運動に深く関わっていた。ノンポリの少数派の間ですら、

平和構築思想や平和思想に対する興味が沸き上がっていた。マキシシと私はこれらの重大事に対する私達の考えを話してほしいと頻りに頼まれた。

「平和をつくる沖縄キリスト者の会」も非暴力に基づく聖書的観点から、これらの運動に関わっていた。例えば、佐藤首相がアメリカ合衆国を訪問した 1969 年 11 月に行われたハンガー・ストライキを支持した団体の一つであった。ハンガー・ストライキは、返還協定に対する様々な取り決めに反対したものだ — その一つが米軍基地をそのまま県内に残し得るという協定だった。マキシシと私は、そのストライキや他の「平和をつくる沖縄キリスト者の会」の活動に参加した。

沖縄に基地が存在している事による弊害は、決して東南アジアの戦場に限られたものではなかった。沖縄社会にもたらされた被害は、特に家族生活に対して、長期にわたる米軍基地の占領によって悲劇的な様相を呈していた。私達が沖縄に到着して間もなく、マキシシはインターナショナル・ソサエティ・サービス（国際的社会奉仕）のボランティア・カウンセラーとケース・ワーカーになった。彼女は主にそこで米兵である父親によって母親と共に見捨てられた混血児と向き合った。

彼女がそこで扱った問題が、占領の社会的破壊性をより顕著に表していた。子供達は社会の中で差別を受け、軍による利己的博愛心の公的宣伝の為に利用された。経済的に生き延びる為に、母親や他の女性達は米軍関連のバーやクラブでしか仕事を見つける事ができなかった。そして、そこで更に搾取や虐待を受ける事になった。この種の“サービス業”は、“売春経済”として概念化されている沖縄の復帰前経済に繋がっていた。

私達が沖縄で働き始めた後、ますます顕著になったことは、沖縄人教会が基地外にある米軍に関連した英語バプテスト教会と経済的・構造的に結び付けられ、組織化されるようになっていたことである。そのことは、私達の考え方や、私達が研修で学んだ自立のかつ経済的に独立した現地教会の発展に協力することこそ宣教師の役割であるとする今日的な宣教のあり方とはかけ離れていたため、私達は困惑した。さらに、その時はまだ分かっていなかったが、米軍により引き起こされる社会的極悪非道行為に対しても、そのこと（訳者注：沖縄人教会が米人教会と結び付けられていること）が現地教会の取ろうとする反対や抵抗の腰を折ることもあった。

後者の一例として注視すべきものは、1970 年 5 月、具志川高校の生徒が帰宅途中で米兵により性的暴行を受けた事件である。この事件は、現地バプテスト教会の近くで起こったので、沖縄人の牧師達と私達は、沖縄バプテスト連盟は軍当局に対して抗議決議をすべきであると提案した。しかし、アメリカ人教会員との関係悪化の懸念を表したアメリカ人宣教師達の反対により、結局如何なる行動も起されなかった。

X. 沖縄、第 1 任期と帰国休暇

1972 年 5 月 15 日に沖縄は復帰したが、米軍基地はこれまで通り残った。復帰後は経済的

生活水準が幾分向上し、クリスチャン社会も自ずと新しい繁栄に加わった。しかし、沖縄バプテスト連盟（1972年以降は Okinawa Baptist Convention ）での生活や仕事の基本的力学は同じままであった。

ランドール一家の初めての帰国休暇は、1972年夏から1973年夏までで、その休暇をニューヨーク市で過ごした。そこで、マキシンはコロンビア大学での勉強を継続し、私はユニオン神学校でクリスチャン倫理学の修士号を取得した。

私達の1973年の帰国休暇は、ウォーターゲート事件の始まりの時期と一致していた。その論争の最中に、様々な驚くべき憲法に違反したCIAと軍諜報機関の活動が暴露された。それには、秘密作戦ために海外の教会や宣教師の繋がりを利用したものが含まれていた。つまり、そのような機関が米国の目的を遂行するために、海外のアメリカ人と現地の教会との関係を積極的にしかも秘密裏に利用していたことは、否定しようのないことであった。

帰国休暇中の全てのABFMS宣教師のために開かれる帰国休暇宣教師会議において、宣教師の役割は、独立した現地の教会への協力者、促進者であることが全員によって再確認された。そして、宣教師としての私達を利用して、現地の人々を搾取しようとする企て — 海外のアメリカ人によるものだが — には用心するようという忠告がなされた。これらの新事実を照らして、沖縄の教会が置かれた状況に関する懸念をABFMSの職員や他の宣教師達と、会議において共有した。

偶然だが、同時期に私達は同僚のアメリカン・バプテストの宣教師達から詳細な提案を綴った手紙を受け取った。彼等は最近基地外に建設された米軍教会で、新しい沖縄伝道を始めていたのである。現地教会の自主的な成長を促進したり、小さな借家やアパートでの伝道から始めることを推奨しているABFMSの哲学に照らし合わせて、私達はその計画が望ましくないと思った。そこで、私達はつぎのような懸念を表明した — 新しい沖縄の会衆は、米軍とのどのような関係からも自由なはずであるが、最近明らかにされた新たな事実では、反米感情を抑制するために、諜報機関が教会との関係を積極的に利用している、と。ところが、私達の手紙のごく一部が全体から取り出され、手紙の明らかな意味を歪曲しようとする形で日本語に翻訳された。この誤解を招く文書は、他の宣教師達や沖縄の牧師達に配布された。この文書が私達を沖縄に帰らせないようにするために何人かの宣教師達によって使われているということに気付いたOBCの牧師達は、このような動きがあることを私達に直ぐに知らせてくれた。彼等は、私達の帰還を確実なものにするためには、私達がどんな行動でも起こすようにと教えてくれた。しかし、私達が沖縄に戻った時には、その新しい伝道は宣教師達が提案したように始まっていた。

XI. 第2任期

私達の仕事は、第1任期と同様の路線で第2期も続いたが、新たに3つの発展が加わった。第一に、饒平名牧師が久米島から沖縄本島へ戻り、神愛バプテスト教会の開拓伝道で私が彼

を補佐するように任命された。

第二に、1973年から私は非常勤で宜野湾市の新しい沖縄国際大学（OIU）で教えるように依頼された。私は、その大学の学生聖書研究会の顧問としても働き始めた。そして、学生達はオープン・ハウスの常連となった。

第三に、1976年に、ロジャー・琉球大学バイブル・スタディのメンバーやオープン・ハウスに定期的に来ていた陶工達が、新しい組織であるアジア研究会（アジ研）を設立するのを手伝った。研究会の目的は、アジアを共に研究し、訪問し、アジア人と交流することであった。それぞれの会員は、一人のアジア人としての可能性を探求すべく、生涯続ける課題を選んだ。

アジ研は ABFMS からの資金援助を受け、OBC の後援で、フィリピン、台湾、タイ、韓国との交流旅行や研究を行った。アジ研は、1979年から OBC や ABFMS から独立し、最初の目的のまま中断することなく継続している。活動内容として、アジ研は、毎週の勉強会があり、そのメンバーは上記の国々に加えて中国も訪問した。また、タイ北部の若い人々との交流が毎年沖縄で行われている。

XII. 第2 帰国休暇

私達の二回目の帰国休暇は 1976 年から 1977 年に掛けてであった。再び私達はニューヨーク市に住んだ。マキシンは、彼女の勉学を終了し、コロンビア大学を卒業した。私はほとんどの時間を、アメリカン・バプテストの教会を訪問したり、沖縄での働きについて報告したりすることに費やした。

それから 1976 年の夏には、当時帰国休暇中のすべての宣教師の為に行われた ABFMS 主催の会議に参加した。会議中のセミナーの一つは、継続している CIA の海外における不法活動を取り上げた。私達が受け取った資料の中に、アメリカ合衆国議会記録 121 巻 185 号 1975 年 12 月 15 日のコピーが含まれていた。それには、海外の宗教団体と関係して、CIA ばかりでなく、空軍情報局、陸軍情報局、海軍情報局による数々の実に驚くべき秘密行動が記されていた。

特に、ある宣教師の司祭や牧師は、情報局に情報を提供することで報酬を得ていた。さらに、CIA 自身は、現地にある教会内の自由主義的で進歩主義的な要素を攻撃したり抑圧したりしているような海外団体を、密かに財政支援し続けていた。

議会記録によれば、著名なバプテスト信徒であるマーク・ハットフィールド上院議員は上院で次のように述べたという：「米軍の宗教団体の海外代表者の一部が CIA と関わることは、全ての宣教師の良好な状態を危険にさらすことになる。」「教会は国家の手足ではなく、国家は教会の手足でもない。」そして次のように強調した：「CIA や他の情報局が聖職者、宣教師、海外修道会の会員と関係を持つことは、このような伝統に反する。」と。更に、もし上院がそのような関係の継続を容認し続けるなら、「私達は、教会の宣教を墮落させ、外交政策と合衆

国の信頼を失墜させる。」と。

セミナーに参加した全ての人は、バプテスト派の同士であるハット・フィールド上院議員の言葉を真剣に受け止めて、勇気づけられた。そしてそれぞれ持ち場に戻ったら、これらの諸問題を宣教師同士でオープンに議論しようと思った。だがマキシンの私が 1977 年に帰沖した時、宣教師同士でこの問題を議論しようとしたが、失敗に終わった。

XIII. 普天間バプテスト教会

1977 年 3 月に沖縄に戻った後、私達は開拓伝道プロジェクトとして、名護良健牧師と一緒に普天間バプテスト教会で仕事をするように招聘された。場所は、琉球大学の近くだった。計画は、普天間緑ヶ丘保育園の開設と同建物内で伝道を開始することであった。私達は 1977 年 5 月 1 日に普天間教会に加わった。

本格的な児童保育が 1977 年 7 月 30 日から末吉重昭夫妻が保育担当、名護牧師が園長として始まった。

そして、1978 年 10 月 8 日から、保育園の拡張として、開拓伝道プロジェクトを始めた。新しいこの働きの名称は、「コイノニア・ハウス（コイノニアの意味は仲間）」であった。名護牧師が主任、私は協力牧師、マキシンの私が私の同僚、そして末吉夫妻は一般の協力者であった。

この働きは、末吉夫妻が普天間教会から離脱した 1984 年 1 月 29 日まで続いた。そして彼自身は牧師として新しい教会をその場所に設立した。その時、何名かの普天間教会員は正式に普天間教会の教籍を離脱し、彼に加わった。

XIV. 論争

1978 年春に、ABFMS の日本およびフィリピン地域担当主事であるアリス・ギフィン女史が沖縄、更に日本とフィリピンを訪問した。彼女の滞在期間中、彼女や他の ABFMS 宣教師との議論の中で、マキシンの私は OBC の働きに対して米軍との強い繋がりが存在することに対する問題提起を再び試みた。軍に関係する英語教会が、OBC 全体に大きな影響力のある役割を占めていた。このことは、OBC の年次総会での代議員について言えば、アメリカ人が楽々と過半数の票を常に集められることを確実にしていた。このような関係構造が、地元教会の力強い成長の必要性を考慮するという ABFMS の原則に反していることを、私たちは強く訴えた。そして、それを根拠に、私達は組織の構造を再考すべきであると提案した。

ギフィン女史と他の宣教師は、沖縄滞在中、私達とこの問題について議論することを断固として拒否した。ところが、彼女が沖縄を去るやいなや反応があった。フィリピンから私達宛の手紙が届いたのである。1978 年 5 月 15 日付の手紙で、彼女は、私とマキシンの「軍隊に対する強い感情」を理由に、「機会が整った時に」私達が「日本の別の場所」に移動すべき

であると決定したことを述べていた。

当然のことながら、神からの召命は私達が沖縄で働くことであるという確信があったので、彼女の決定に従うことは絶対にできないと返答をした。更に、キリスト教宣教師の軍隊に対する感情が、宣教師の移動要請の受け入れ理由になるはずがないと反対した。

それにもかかわらず、1978年9月11日付「内密」と書かれたギフィン女史からの2通目の手紙には、ランドール一家の「関西への移動」の「手配は整った」と述べてあった。私達は、前に述べた同じ理由で再び断った。その後の数ヶ月間にABFMSといくつもの手紙のやり取りがあった。そして、ABFMSからの手紙にはいつも「内密」の印が付けられていた。しかし1979年初頭になると、このやり取りは一般の知るところとなり、OBCを巻き込むことになった。(事実としては、私達が後に知ったことだが、いわゆる内密と記されていた手紙は、実際には内密ではなかった；手紙のコピーは、私達の知らないうちに、ABFMSより定期的に宣教師仲間に送り続けられていたのである。)

とうとう、1979年7月30日にABFMSは私達の給料支給を停止した。私達はABFMSの正式な停止決定に関するいかなる連絡も受けなかった。これに反して1979年のOBC総会時には、ABFMSはOBCに対して、ランドール夫婦の「宣教師としての職務は解任された」と報告したのである。長いささくれ立った議論の末、年次総会は正式にABFMSの決定を受理した。

何故、こんなことが起こったのか？ 公開されている記録が、第26回沖縄バプテスト連盟年次総会(1979年9月24-25日、議長 国吉守牧師)の議事録として正確に残っている。

さらに、正式なものではないが良心的な記録として、「信仰と良心の自由のために—ランドール宣教師問題に関する声明—」として、名護良健牧師(普天間バプテスト教会)、城間祥介牧師(宮古バプテスト教会)、当山武牧師(親慶原バプテスト教会)、饒平名長秀牧師(親愛バプテスト教会)、横田盛永牧師(金武バプテスト教会)により発表された。

私達の解任に関する理由は、「正式」には曖昧なままである。とは言っても、理由は完全に明らかである。1978年5月15日以来明らかなことは、ABFMSが、米軍に関係した沖縄での宣教活動部門から私達を排除するという圧力に屈したことである。ABFMSは、私達を日本の別の地域に左遷させようとすることによって応じた。紛れもなく、そのことこそ、私達が疑問を投げかけ、米軍による基地外の教会との関係を用いた明白な操作の影響について報告書を書いた理由だった。特に、米軍基地、米軍基地により行われている戦争、基地に関連した不正行為に対する沖縄のバプテスト信徒からの反発を静めるために、これらのアメリカ人が行っている取り組みに対して私達は疑問を投げかけた。

OBCのような、沖縄県民の重要な一画を占めている存在の沈黙は、この地での恒常的な駐留を安定化しようとしている米軍にとって、非常に重要となりうるものであった。よって、コザバプテスト教会やセントラルバプテスト教会の南部バプテスト宣教師である牧師達と何人かの現役米軍人達とが、公然とABFMS宣教師と一緒にあって、私達を沖縄県から追い出

そうと、断固として、しかし最後は徒労に終わった運動に加わったことは、全く驚きではなかった。徒労に終わったことはその後、私達がここに留まって神の召命に忠実に応じる道を見出したことによって、明らかになった。

XV. 天幕造り

1979年から私達は、パウロの遺業である宣教師つまり「天幕造りの職人」となった（使徒行伝 18 章 3 節）。私は中断することなく普天間バプテスト教会の協力牧師を続けた。私達は、大学の仕事をすることで自活した。今日、私は沖縄国際大学の教授であり、マキシンは琉球大学病院の保健学科の講師と異文化カウンセラーである。

私は協力牧師として、名護牧師を説教やその他の仕事で支え、さらにコイノニアで始まったバイブル・クラスを、コイノニアの仕事が中断した時に普天間に移し、継続した。この奉仕を通じて、何人もの人が普天間教会に紹介された。名護牧師の後任である藤田久雄牧師もこの奉仕から普天間教会に導かれた。1995年には、月例の英語礼拝が夕拝として加えられた。

私達の人生を振り返ると、神の摂理と配慮に驚き、感謝するばかりである。私達は、神が準備し、この場所・この時に至るわが人生の道の一步一步を導いてくれたことを理解することができる。そして、普天間バプテスト教会に関して言えば、私達は神から豊かに祝福されて来た。普天間は、永遠の命への希望で結ばれており、皆が他者の重荷や喜びを分かち合う群れである。普天間は、独自性を具えた鋭敏な良識を持った教会である；「天地の模様」と「今の時代」の両方を見分けながら（ルカによる福音書 12 章 56 節）、教会が周りの世界に鋭く適合している。私達が信仰と交わりの中でともに成長する時、普天間教会自身が次のような御言葉の生ける証となる。「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである（エペソの手紙 2 章 10 節）。」

緑ヶ丘保育園の歩み

緑ヶ丘保育園主任 名護タケ

創立当初のこと

1964年（1月）の普天間教会総会において保育園の設立と、それに伴い会堂を増築することも決まりました。保育園の設立にあたっては、園長は牧師（名護良健）が兼任し、保育者には名護タケ（西南女学院保育科卒）と、新里敏子（旧姓米須・東京保育専門学校卒で、普天間教会出身、現在は金武教会会員）があたり、助手として照屋光子（前原教会）が手伝ってくれました。園医として故宮城条善先生の応援も受けました。

保育園を開園するにあたり、名護タケには生後4ヶ月の乳児（長女より子）を抱えてのスタートでした。総会の決議から開園までの3ヶ月は園庭の整備や、室内外の遊具、教材の準備など慌ただしい日々でした。会堂を保育室に変えるためにはコンクリートの土間を床張りに、机、椅子、道具棚、靴箱（当時はすべて木製）など、急ピッチの工事が始まりました。

さて、4月開園の園児募集で集ったのは11名の園児でした。朝7:30～夕方6:30まで（月～土）、時には7時にもなりました。2階増築はまだまだ、という状況の中で月曜日には礼拝で使用した長椅子を講壇側に積み重ねて片付け保育室とし、土曜日には長椅子を出して礼拝の準備をするという保母たちの1週間の仕事となっていました。2階増築までの5年余、こうした生活が続きました。

園の名称は

緑ヶ丘保育園としました。当時、この一帯は道路工事用として碎石の採れる場所でしたので、丘の上は広々としており、子どもたちの楽しい遊び場となりました。その後は次第に緑豊かな場所となり、詩篇23編にあるように子供たちの心が育つ、豊かな場所になると思っていました。そして自然の中で伸び伸びと育てる保育をしたいという思いで緑ヶ丘とつけました。幼児教育創始者のフレーベノレの提唱する、「遊び」が保障される場となるようにと祈りつつ、の保育の取り組みでした。振り返って考えても、この場所は水、太陽、空気、土、緑と、子どもたちのいのちを育むのに素晴らしい場所となっています。

44年を振り返って

創立から今日まで特筆すべきことがたくさんあります。まず、歴代園長として名護良健牧師（30年）、藤田久雄牧師（3年）、W・Tランドール牧師（7年半）、現神谷武宏牧師と続き、子どもたちを気にかけて、祈り、園児と保育者を助けてくださいました。40名あまりの保育者にも助けられました。女性の職場ですから、長期の勤務は困難の中で10年位続けた方もあります。夏の厳しい暑さにも負けず、保育内容の充実に向けて、キリスト教保育の精神をよく理解し、取り組んで支えてくれました。なかでも忘れられないのは、障害児保育の取り組みが多かったことです。情緒障害、心臓病児、少児麻痺、毎年数人預りましたが、ほとんどが他の園で断られて、行き場のない子たちでした。十分な保育だったかはわかりません。しかし、この子どもたちと関わることができたのは感謝です。

父母会にはたくさん助けられました。父母会は子どもたちの育ちを助けるために園と歩調を合わせ、働く組織です。それだけではなく、物心両面で園を支えてくれました。まず、父母会で親同士が仲良くなり、孤立する親がいないということが今の感想です。お互いに連絡を取り合い、声をかけ合っているのは、保育の助けにもなっています。

物的にはバザーの開催や、個人的な献品などで支えてくれました。創立当初の旧園舎時代からプール、床の張替え、屋根のトタン張替え、園庭をはりめぐらしているフェンス、飼育小屋、絵本、本棚、体育遊具、音響機器など園内外の備品等や新園舎建設に多くの卒園生と御父母の支援がありました。

これから後も教会の保育園（キリスト教保育）としてこの園に関わった子どもたちに、親たちに、保育を通して証しをし続けていきたいと願っています。

普天間教会史点描—沖縄伝道の思い出

山路 一

I

平成6年8月14日

1 沖縄伝道への誘い

私、山路一は最初から沖縄伝道を自覚していたわけではない。1955年3月に基督教研究所の第1回生として卒業する予定になっていた。前年夏もちかくなり、指導教官に呼び出された私は、「今年ば夏季伝道に福音丸に行かないかね。夏季伝道に行くということはそこが任地になるから、その点は了解して貰いたいがね」と申し渡された。少しの時間を置いて、教授の申し入れを受けることとした。福音丸とは日本バプテスト同盟の瀬戸内海教区を巡回する働きである。どの教団でも夏季伝道と任地は慣例として一致するのが通例である。そんなにそのことについての抵抗感はなかった。当時、福音丸には専任者として小野牧師がおられた。向島教会には責任者としてブラネン宣教師がおられ、福音丸の協力牧師でもあられた。当時、宣教師は夏季休暇中で、少し早めに向島教会へ出かけることにした。教会の教務の合間を福音丸に乗船することとした。そこには私の亡父の神学校時代の友人たちが何人かおられ教会の高野高盛牧師もその一人。私の奉仕について、「それはうれしいことだ。山路の息子なら間違いない。」と喜んでくださり、歓迎されたものだ。その後も折を見ては出かけることにした。

2. 沖縄伝道への誘い

夏季伝道も明けた翌年、新生会主催の卒業予定者の送別会が開かれ、出席した。横浜公園内の米軍チャペルである。研究者からは私に、加納政弘、高橋文子が出席した。他神学稜の学卒者もいた。その時、奈良教会の嘉手納牧師の息子二郎君から会いたいとのことで待っていると、「話がある」との由である。彼とは関東学院青雲寮時代のルームメイトである。オルガンの名手でもある。私に音楽への関心を持たせたのも彼。

彼はポーリンジャー宣教師を伴い姿を見せた。ポーリンジャー宣教師が言うには、「自分は間もなく使命を感じ沖縄に出かけるが、自分の協力者を同道したい。ついては是非君に来て貰いたい。承知してくれないか」と言う。二郎君の父は沖縄出身である。わけあって、沖縄へ帰れなかったらしい。しかし沖縄伝道への思いはやみがたく山路にその思いを託したものであろう。沖縄には当時3人の働き人しかいないという状況であった。伊波牧師、大浜牧師、照屋寛範牧師である。二郎君の補足説明によれば、沖縄伝道の候補基準として、1。英語が話せる人、2。児童伝道が出来る人、3。オルガンの出来る人。4。運転免許所持者であること、ということである。そこで山路に白羽の矢を立てたということらしいのである。しかし未知の地でもあり即答は避けた。福音丸に心はひかれていたのである。しかし福音丸には安藤恒次が赴任することになる。退路を絶たれ悩んでいると、内藤忠雄牧師に助言を頂いた。「自分の意見はきちんと言うべきだと。曖昧にせずね」。

3. 菅谷仁牧師の薦め

ちょうどその頃、菅谷牧師に「一度遊びにおいで」と言われ訪問することになる。当時、新生会の主事であられた。目頃敬愛する大先輩でもある。最後の主事であられた。全国を東奔西走、多忙な日々であられた。任地の話になり、事情をお話すると、先生は「とにかく沖縄へ行きなさい。沖縄は君を必要としているんだよ。」帰りにはご自分のトランクを下さった。スイス留学の話をお勧められたこともある。今にして思えば、先生は大人物で同盟でも稀有の存在であられた。留学の話は実現しなかったが。

II 決断

1. 天幕伝道

決断のつかないままボーリンジャー宣教師と共に行動をすることとなる。沖縄赴任に備えて、天幕設営、集会案内、天幕伝道の予行演習をするという目的もあったようだ。先ず、大阪天王寺の桃谷教会跡地での天幕集会は忘れることは出来ない。その夜は夜警も兼ね天幕で泊ることになる。寒い夜である。一夜明け一人の物乞いが来訪した。「食べ物はないか」。所持金をはたいてあげてしまう。腹すかしたまま走り回ることになる。満開の桜のもとでの山下教会での集会も忘れがたい。大阪神愛教会での集会、この教会には当時、国公立大学の教授たちがキラ星の如く在籍しておられた。岡辺新生教会での集会も忘れがたい。豊岡教会、城崎教会、などなど。ヤンソン宣教師もおられた。沖縄まで行かなくてもここにも伝道地はいくらでもあるではないか、とも考えた。その考えを変えたのは、土庄高校長の言葉である。

2. 最終決断

6月になりボーリンジャー宣教師がいよいよ準備のため沖縄へ渡る。既に、宜野湾大山に宣教師館の建築が進んでいた。その留守の間、私は小豆島に滞在、お世話になることとする。保育園の手伝いやら教会の集会やらと過ごした。まだその段階でも沖縄行きを迷っていた。そんなある時、先の高校長が「宣教師は偉いですね。アメリカにおれば近代的な生活で楽に暮らして行けるのに、外国まで来て伝道するのですから。尊敬しますよ」と言う言葉が、私の沖縄行きを決断させたのである。

3. 沖縄渡航準備

8月になるとボーリンジャー宣教師が家族とともに沖縄渡航するために帰阪した。出迎えに出た時に、「準備調い次第沖縄へ行きます」と言うと、「沖縄で待っています」と言い残し船上の人となる。その間奈良教会の嘉手納牧師宅にお世話になる。9月1日大阪商船で沖縄渡航が決まる。

III 沖縄渡航

1. 出発

いよいよ沖縄行きである。長い迷いの末である。早めに棧橋へと向かう。復帰前であり、パスポート所持である。港には鈴木牧師がお見送り下さる。他に青年たちがいた。もたもたして午後10時によやく天保山棧橋を離れる。途中神戸に立ち寄る。神戸を出たのが午後11時。沖縄まで三泊の旅である。一夜明けて未だ船は松山沖。2日目の夜が明けてよやく沖縄慶良間沖に差しかかる。3日目の夜、奄美名瀬入港である。4日目の朝、沖縄島が見えたという声に促され甲板に出ると、はるか水平線上に島影が見えた。やがて船は沖合いに停泊、沖縄側の入国係官が乗船して来て、入国審査が始まる。健康診査、手荷物検査である。やがて船はタグボートに引かれて那覇港入港。那覇着は9月4日である。私は伝道師ということでフリーパス。誰が出迎えに来るのだろうか。知人はいないし。或いは誰も出迎えてくれないのではないかと不安にかられる。しかも主日である。すると、「山路先生!」と声がするではないか。一人の青年が手を振るのが見える。玉城啓道君である。当時、那覇牧志郵便局勤務の青年である。彼と那覇教会へと向かう。彼は後に関東学院に進み牧師となる。

2. 新里信姉との出会い

新里姉は那覇教会会員である。照屋牧師の薫陶を受けられた方。普天間小学校裏に住まいする。夫君章氏は校長先生。中城の泊教会一現中城城東教会一創立に貢献された。奏楽担当者でもあられた。姉妹は小さな書店を見ておられた。亡父の語る同姓同名の信子さんは別人である。近くにお住まいの宮城条善先生は小児科医で、その後、何かとお世話になることになる。さて、新里さんのご紹介で新築の宮城さん宅に間借り出来ることになる。10月になり、普天間に定住することになる。主日は那覇教会の礼拝へ出席していたが、いよいよ開拓伝道を開始する。

2. 天幕伝道

活動開始するに当たり、天幕伝道が主力になる。当初、那覇、普天間、室川、安慶名、金武が候補地としてあがり、持参した500人収容の天幕が大活躍である。設営はボーリンジャー宣教師と二人です。会場準備には伊波牧師他青年たちが応援して下さり、1週間から数日の伝道である。普天間では拠点がなく、小学校の校地を利用しようと校長を訪ねた。大里校長はこころよくバレーコートを貸して下さることになった。134名の決心者が与えられた。そのなかに新里信、桃原静、現宜野湾教会牧師の末吉重昭らが出てくるわけである。

IV 教会用地選定

1. 「沖縄バプテスト」発行と編集業務

沖縄赴任当初の仕事として機関紙の編集がある。元は照屋寛範牧師の戦前の「暁鐘」—けいじょう—が前身である。普天間から那覇の印刷所かよいは大変な仕事ではあった。なにしろ原稿集めがこれまた大変な仕事である。他に教会紹介のパンフを出したり、特集を組んだりで大忙しである。

2. 普天間教会の誕生

この教会誕生の経緯は1955年7月、ボーリンジャー宣教師来沖のころから、家庭集会として始まるようである。本格的な伝道開始は11月の天幕伝道である。天幕伝道のあと定例集会のため校長の肝いりで音楽教室が利用できることになる。

当初の集会は新里ファミリーと桃原さんが中心である。沖縄赴任1月して那覇へ出て行く。印刷所まわり、渡眞利家訪問、昼食を済まして民政府前を歩いていると、顔見知りの人物が土手の上を歩いている。民政府勤務の大河原健二郎ではないか。専門学校時代からの友人である。彼は「悪いところで見つけたな」と言ったが、まんざらでもなさそうであつた。彼は後に普天間教会の中心的存在となり、宣教師の通訳をしたり、青少年活動をリードしたり、役員をしたりと夫妻ともに良い奉仕をされた。後に、宣教師問題を契機に教会は分裂、宜野湾教会が誕生するが、これも分化、発展のひとつであろう。

その末吉牧師を育てたのも、宜野湾教会誕生に力になるのも大河原である。当時、普天間神宮となりに適当な空き地があり、そこに教会堂を建てるのが夢となるが、それは実現しない。

V. 帰国の決意

6月になり世話になったピース宣教師が帰国することになり、お別れをしに一時帰国することになるが、ボーリンジャー宣教師も許可を出してくださり、帰国する。照屋牧師には一時帰国の理由を述べ、帰任の際の身元保証人の承諾を得た。しかし帰国して見ると、沖縄からは「もう来ないで良い」という非情な連絡。志半ばで沖縄伝道を終える。不本意ながらである。詳細はここに記さない。

(註：これは山路一牧師の原稿に名護が一部手を入れ、編集した。)

種は播かれた

山路 一

1955年9月4日午後、沖縄に着任した私は、早速、金武に住む伊波盛次郎先生のお宅にお世話になり、一週間のうちに自分の住まいを定め、宣教態勢を固める事になりました。住まいの候補として挙げられたのは、大山の宣教師館から近い所という事で大謝名と普天間が候補に挙げられました。大謝名を下見してから普天間に来たのですが、そこで新里信子姉との出会いが待っていたのです。

ところで、私の沖縄赴任が決まった時に父に報告しますと、父は「私が、神戸で牧会をしていた時に、教会に沖縄出身の新里信子という姉妹が来ていたんだけど、何とかしてその姉妹に会えるといいね」と言ったのです。以来、新里信子と言う名前は私の念頭から離れる事はありませんでした。普天間で伊波牧師から新里姉を紹介された時、「この人が父の言っていた新里姉ではないかな。いやそうであって欲しいなあ」と考えたのは言うまでもありません。話が一区切りついたところで、勇気を出して聞きました。「新里さんは内地でお暮らしになった事はありませんか？」と。返ってきた言葉は「いいえ、ありません」でした。人違いでした。しかし、私はどうしても父の知っている「新里信子さん」と、この「新里信子さん」を切り離して考えることは出来なかったのです。この時に私は「ここで新里姉に会えたのは神の導きである」と信じて自分の生活の拠点を普天間に置くことを決意しました。当時の普天間は、現在よりは静かで家数も少なく、首里から来る道と那覇から石川へ行く道が会おう所で交通の要衝でもありました。当面、新里姉の斜め向かいの新築したばかりの宮城家の一間を借りて生活が始まりましたが、自炊が出来ないので外食に頼る必要が有りますので不適當という事から、一ヶ月後に照屋真吉さんの家を紹介されたのでした。ここはお婆ちゃん

と、真吉さん夫妻と勝君、悦子ちゃんの四人家族でした。最初の頃は、ここの静子夫人と新里姉母子四人が教会の中核でした。何時も静子姉と一緒に裏口から会場である普天間中学校の音楽室へと出掛けました。

さて、生活の本拠を決めた次は、折角ここで生活するのですから、普天間でも開拓をしようと言う専になりました。普天間中学校へ出掛けて校長先生にお会いしました。その時の校長先生は、現在教会のすぐ下で内科医院を開いておられる大里先生の御父君です。大里先生は後にコザ中学校の校長先生に成られた方ですが、名校長の誉れ高い方でした。大里先生にお会いしますと、温厚な方で全身から温かい雰囲気の流れ出るような方でした。

普天間伝道計画を話して「取りあえず学校の一室をお借りできませんか」とお願いすると、「オルガンが有った方が便利でしょうから、音楽室をお貸ししましょう」と言う返事でした。現在私の手元には何の資料もありませんから、自信を持って言えませんが、その時期は、九月の下旬頃ではなかったかと思えます。というのは、9月27日の教役者会では、嘉手納と普天間を新開拓地として山路が担当することが確認されており、10月5日に那覇の行政府の下で、突然、大河原兄に出会っているのですが、その時に普天間の集会を念頭に置いて「集会にいらっしやいよ」と勧誘しているのですから、その時には普天間の集会はずでに発足していた事になります。

十月の連盟理事会では、嘉手納と並んで普天間の開拓が承認され、本格的な伝道活動が始められましたが、中核は新里姉母子と、照屋静子姉でした。ここで間もなく桃原静子姉と出会う事になります。新垣吉子姉もその頃から来られたように記憶しています。

やがて、11月9日から12日までの四日間、普天間中学校のテニスコートをお借りして天幕伝道集会が開かれましたが、なかなかの盛況でした。中学生が大半でしたが、この中から現在は連盟の中核として活躍しておられる方も出ておられる事を知るときに、神の御手の御業のすばらしさを実感させられます。

照屋真吉さんのお宅では、とてもよくして頂きました。新里姉も細かいところへ手の届くような配慮をして下さいました。当時、私は、ボーリンジャー宣教師と数ヶ所の集会を回る傍ら、日曜日には嘉手納（朝）、普天間（昼）、中城（夜）と集会の責任を持っていましたので、日曜日は大変忙しい思いをしましたが、ある時、朝から発熱で、嘉手納から帰ってきたときは大丈夫かと思うくらいでしたが、新里姉が宮城医院の先生（お兄さん）に頼んで下さり、日曜日であるのにも拘わらず、治療をして頂いた事があります。これは終生忘れることの出来ない事です（新里姉、感謝！）。普天間宮の隣りに空き地があって、鉄条網で囲まれていましたが、何とかして手に入れ、教会堂を建て、朝夕には通行中の人々に鐘の音と賛美歌を聞かせられるような会堂にしたいと考えたのもこの頃でした。

不思議な縁で播かれた種は、その後、幾多の先生方により、水注がれ、神に育てられ、多くの実りをもたらしました。パウロの言葉を思い出します。「実に神の名はほむべきかな」です。

1955年7月、私のお世話になった宣教師が隠退して婦米されると言うことを妹から知らされ、ピース宣教節に感謝と慰労の言葉を贈り、見送るために帰りました。すぐに帰任するつもりで準備していましたが、事情があって帰任する専が出来なくなりましたが、心はいつも沖縄にありました。照る時も、雨の時も事あるごとに沖縄を思っていましたし、問題のあるときは密かに心痛めてもいました。しかし、出てくるのは四十年前の沖縄です。

普天間の教会も立派になりました。しかし、油断をすると原始キリスト教会のように「キリストの愛」を離れる事になります。皆さん、初心を忘れないで下さい。イエス様から離れないようにして下さい。身なりは立派でも、心がイエス様の好まれぬような状態では、初心に反します。

普天間教会の発展を祈ります。

（付記：原文には執筆年月日の記載がありませんが、藤田牧師の手で「9月20日着」とあり、原稿が1997年の9月20日に寄せられたことが分かります。 編集者）

教会創立50周年に当たり

国吉 守

普天間教会の皆様、教会創立50周年記念、誠におめでとうござます。心からのお祝いとお喜びを申し上げます。

普天間教会の創立は1957年ですが、それに先立ち、1955年頃普天間から熱心に那覇教会に通っておられた一人の姉妹の信仰の姿が当時の那覇教会の照屋寛範牧師の目に止まり、普天間での集会が祈り始められ実現するようになったのです。当時、日本バプテスト同盟の山路一牧師が沖縄伝道のため来島され、嘉手納と普天間での開拓伝道に従事されました。ボーリンジャー宣教師の協力により普天間中学校の音

楽教室で最初の集会が持たれました。山路先生は一年後には本土へお帰りになりました。その頃、私は那覇教会の副牧師をしていましたが、照屋寛範牧師とボーリンジャー宣教師の勧めで普天間の開拓伝道を時折りお手伝いするようになりました。1957年2月からはシュワルツ師が伝道奉仕されることとなり、大河原健二郎兄が通訳として奉仕されました。大河原兄はその他、伝道奉仕、青少年活動等にも大いに協力されました。

普天間中学校の音楽教室からやがて、独自の集会所を持ちたいとの祈りの結果、禰覇商店の空室を借用して毎週の礼拝を日曜日に持つようになりました。小さくても自分たちの集会所であることの喜びがありましたが、さらに今度は自分たちの教会堂を持ちたいとのビジョンとなり、1961年には現在地に百坪の土地を購入することができました。

当時、私は那覇教会の副牧師と普天間教会の牧師も兼任し、同時に屋富祖教会の開拓に従事していましたが、やがて、屋富祖教会は関東学院大学神学部を卒業された玉城啓道牧師が就任されることになり、私は普天間教会の牧師と那覇教会の副牧師を兼務することになりました。

普天間教会牧師に就任してからの最初の仕事が会堂建築でありました。教会員は会堂建築に燃えておりましたので自己資金の2千ドルと連盟補助の2千ドルの合計4千ドルで礼拝堂兼牧師館は1961年に完成し、教会員に大きな喜びを与えました。小さいながらも新築の礼拝堂と牧師館に一年間住むことができた感謝と喜びを今も時折り思い出すことがあり、恵み深い主の御名を称えています。

1962年には西南学院大学神学部を卒業された名護良健牧師を副牧師にお迎えして一年間共に牧会に当りました。翌1963年に私は普天間教会の牧師を辞任し、代って名護良健副牧師が普天間教会の牧師に就任されました。以後、名護牧師と共に普天間教会は連盟でも歴史のある中堅の教会としての堅実な歩みを続けました。特に名護牧師と武子ご夫人は幼児教育に力を注ぎ、緑が丘保育園を設立して幼児たちの健全育成に貢献されました。その中から多くの子どもたちがイエス様の光の子として育ちました。その子供たちの父母、家族を通して地域社会に福音が浸透したことは普天間教会にとって大きな恵みであり、将来へ継承すべき宝であると思います。

普天間教会と私との関係は時間的に言えばそう長いものではありませんでしたが、戦後の混乱期が未だ続いていた時代でもあり、教会活動が比較的に喜ばれた時代でもあって、私としては青年牧師時代を忘れることのできないよき先輩たち、よき聖徒たちに恵まれ、ビジョンに満ちた楽しい牧会生活を送らせて頂いたと今でも感謝し、懐かしく思うことがあります。それは、普天間教会がキリストの愛を中心にした家庭的雰囲気のある教会であったからだと思います。当時の日記の一部には

家庭集会（新里執事宅）

1961年12月5日（火）夜8時

新里姉、安里姉、渡慶次姉、松本姉、
祈祷会

1961年12月8日（金）夜8時

春山兄と国吉二人。ピリピ4・10～
結婚式

1961年12月14日（木）

照屋繁雄、桃原信子

バプテスマ式

1961年12月17日（日） 熱田海岸

金城文子姉、普天間初子姉、安里春子姉

等々の記録があります。まるで昨日のようにも思われるのですが、50年近い歳月が流れています。50年の間にはいろいろなことがあったと思います。忘れられないことの一つは一つの群れが宜野湾教会から分離して行ったことでしょう。

しかし、今や、普天間教会の株分け教会ができたように宜野湾教会も独立教会となり、一つの教会から二つの教会に発展しているのです。歴史の主なる神は万事を益となるように導いて下さいました。誠に主のみ名はほむべきかな！であります。

普天間教会はその後、長年牧会されたベテランの名護良健牧師に代って、藤田久雄牧師が三年間牧会をされ、ランドール牧師に代わり、そして、2007年には新進気鋭の神谷武宏牧師が就任され、宣教、牧会の更なる充実に向け邁進されておりますことは普天間教会にとっても、連盟にとっても大きな喜びであります。

竹は節目があるために弾力性に富み力強く伸びて行きます。50年の節目を迎えられた普天間教会が牧師、役員、信徒がいよいよ聖霊の一致をもってこの世の荒波を乗り越えてさらなる発展を遂げられますようにお

祈り申し上げます。

(本稿は40年記念誌に際し寄稿されたものを、この度ご本人が改めて修正して下さったものです。編集者)

普天間バプテスト教会、心のふるさと。40周年おめでとうございます。

大河原健二郎

「ケニー、沖縄へいくんだって？ 行ったら、山路が伝道してるから手伝ってやれよな」と坪さん。(京都バプテスト教会に赴任したばかりの海老坪牧師や山路君とは、横浜関東学院での仲間。もと陸軍下士官の坪さんは友人に「君」はつけない。悪気はない。) 私はずっと長期欠席不良不まじめ信者。(え？山路君の手伝い？飛んでもない、教会なんか行ったら、献金はさせられる、用事は言いつけられる。えらいこっちゃ、桑原クワバラ。沖縄へ行っても山路君には会わないで置こう...)「うん、まあな」と私。

1955年10月4日、生まれて初めて飛行機に乗って生まれて初めて沖縄という所にやって来ました。27才。翌々日、新しい職場に初出勤の帰り、知る人もない那覇の街、トボトボとバス停へ...「やあ、いつ来た」と聞き覚えのある声。(しまった！山路君に見つかっちゃった。でも、友人だから私も一生懸命ニコニコ)

「俺いま普天間という所で伝道してるから、出て来いよ」と彼。「うん、まあな」と私。

それから半年。嘉手納、ハーバービュー、家族を呼び寄せて勢理客、そしてマーシー(宜野湾大山)に落ち着いて...さて、退屈。行く所がない。映画館は超超満員で煙もうもう、喫茶店はない、公園はない、並木道はない、親戚もいない、友達も...あ、居た。「山路君の伝道所でも行って見るか」普天間中学(当時、普天間、いや野嵩高校の隣)、音楽教室で礼拝。新里姉、古波蔵姉、桃原姉、伊波(現・新垣)姉、糸満さん、宮良さん、その他...週報がない。作ろう。手書きで。山路先生、オルガンは弾くは、運転はするは、英語はしゃべるは、大人の説教、こどものお話...万能選手。日曜朝は嘉手納、午後は普天間、夜は(中城)泊、週日は前原、安慶名、漢名、中川、壺屋の各伝道所。彼が普天間に住んだのは新里のお母さんがお世話をしたからだ。

「どうしたの？赤い顔して」と私。「8度5分ほど出たんで、今、宮城條善先生に注射してもらって来た」と山路先生。礼拝後、普天間の街角で(よくバッタリ会うよ、この人とは)。「じゃ、早く帰って寝てろよ」と私、サラリーマン根性。「いや、飛んでもない。これから泊へ行かなきゃ。みんな集まって待ってるから」(へえー、伝道者って大したもんだ。何と偉いもんだ。)ただの友人の一人としか思って居なかった山路一(はじめ)先生を、それ以来ずーっと尊敬しています。

「山路先生が沖縄に帰って来て、今まで通りずっと働いて下さるようにボーリンジャー先生にお願いして下さいよ」と新里のお母さん。行った。でもミイラになって帰された。ポ宣教師を説得するつもりが、米人説教者の通訳をしると説得された。山路先生は本土に一時「帰国」(そう、パスポートの要る時代でした)したまま、「二階でハシゴを外され」て沖縄には遂に戻れず。唯一の慰めは、その「帰国」少し前の1956年6月20日その普天間での初穂である伊波吉子さんのバプテスマに立ち会われたことでしょう。あの感激の光景、目をつむるとありありと浮かん来ます。よく晴れた暑い日でした。泡瀬海岸に揺れるすすきの穂波がヨルダン川の芦を思わせました。(新垣姉は今も宜野湾の活会員。)

雨が晴れて遅い午後の日差しが強かった。礼拝後、ゴム長をはいて黒い雨傘を持った国吉守先生とバス停へ。「実はこれから結婚式なんですよ」と先生。「え？どなたの？」ご自分の、と聞いてびっくり(もっと慌てなさいよ、こんなことしていいの？ああやっぱり牧師ってのは自分の事は後にしちゃうんだなあ。)このとき先生23才、でもすべての点で私よりはるかに成熟した大人だった。金網に囲まれてまるで豆基地のような古波蔵さん宅で先生の熱心な使徒行伝の講義を聞いた(内容は忘れたけど)そのことは忘れられません。短い期間でしたが、山路先生の後、米人先生の来られる迄、有り難うございました。

「土曜日のうちで燻ってるなんて...」と言ったら、国吉先生、「くすぶってる、とは面白い」と笑った。先生、山路先生の使ってたランプレッタというスクーターを引き継がれたが、車はまだ。で、先生と、お腹の(アリサちゃん)で大きな奥様とをよくドライブに引っ張り出した。牧師さんにとって土曜日は大事な日なのを忘れて... (今頃)御免なさい。その頃の沖縄の砂浜、どこでも貝殻がいくらでも拾えました。

「ケンよ、私の説教の英語がよく分からなくても、聞き返さないでいいんだよ。君が日本語で良いようにまとめて呉ればそれでいいんだから」と、普天間の新しい先生、ラッセル・E・シュワルツ米空軍特務曹長。(御陰で日本語訳を日本語らしく通訳することを覚えた。)彼はよく冗談を言った「私は今日ロマ書から説教したけど、ケン、君は何からやった？マタイか？ヨハネか？」私達の伝道所は音楽教室から、彌覇商店の裏に借りた6坪の小屋に移った、週報も謄写版を買った、オルガンはいつだったろう...来会者も増えた。シュワルツ先生は温かくドッカとした方、奥様もマメで親切。よく皆んなで歌ったりゲームをしたり、食べ

たり、いつも明るく楽しかった。

教会って所には確か日曜学校というのがあったんじゃないかな、と或る時フト気が付きました。作ろう！でも、このズッコケ怠け信者（私）、日曜学校なんて出たことも覗いたこともない、まして手伝ったことなんてない。困った。国吉先生に相談。「教師の友」を買った。なんとか子供礼拝はやれた。分級！さあ大変、先生がいない。えい、ままよ、未浸の青年諸君（しか居なかった）を口説いた。「何すればいいんですか？」「なに、遊んでやってよ」「どこで？」「ほら、あの草っばら、あの木の下、あの階段..」テレビは勿論なく、ラジオも有線時代。小屋は満員、大成功。クリスマスには6坪に入り切れない子達が木登りして覗いて...飴を小袋に入れてプレゼント。準備した50個はアツという間。お菓子屋に走ってもう50個。増える。子供が。ワンサカ。又走って、もう100個！

「おじさん、何してるネ」「なんにも。」借りた小屋は日曜しか使わない。牧師は教会とかするらしいが、シュ先生は日本語が出来ない。話し相手位なら私でも出来る。にでも行って電気をつけていれば、講か来るかも。行った。誰も来ない。ぶらぶらしていた中学生の女の子達が寄って来た。「何で座ってるネ」「うん、誰か来ないかな、と思って」「誰が来るの？」「さあ、誰が来るかなあ」「分からんで待ってるネ？ここなんネ？」「ここ？教会だよ」「ふーん。ネーネーはさ、前はミタマ教会アルイってたけどサ、今は洋裁学校アルイてるサ」「ねえ、君達、聖書の勉強してみないか？」「うん、するする」瓢箪から駒。さあ、困った。この落第信者に、教えられる訳がない。あ、思い出した。私の「ザ・先生」、イエス様の愛を身を以て示して下さった森島卯之助先生（故人）が、餞別に下さった「新約略解」。（こんな重い本呉れて、先生は。しようがない、持って行くか）持って来て良かった！ここで役立つとは！何と不思議なご配慮！

1957年には、7月7日の7名の兄姉のほか10月と11月にバプテスマがあり、教会設立を見て（よかった！）から、シュ先生は1958年末頃（と記憶）帰米された。（退役後、ミズリー州セダリア市で牧師をされた。新里のお母さんとテーゲー同年配。懐かしいご夫妻、お元気でしょうか？もうすぐ、向こうでお会い出来ませんが...）その後は、どうしてもあの国吉先生を、と私達頑張って遂に来て頂きました、那覇教会副牧師兼任で。小さいながら牧師館の付いた会堂も与えられて、国吉先生ご夫妻（とアリサちゃん）は普天間に住んで下さった。教会は益々成長発展。バプテスマも後から後から（あの條善先生も）。あの中学生達も今や高校生。新しい中学生も加わってC.S.は幼、小、中、高と、又先生たちも揃った。高校生（種蒔会）諸君とよく遊んだ（勿論聖書の勉強もしたけど）ドライブ、食事会、おしゃべり...空いた外人住宅の掃除で稼いで献金したこともあった。何習ったか皆んな忘れたけど、あの頃は楽しかったなあ」と大人になった亀（亀川康雄）さん。（国吉先生、よくまあ何でも任せて自由にやらせて下さったものだ、と後年大分経ってから気がついた。陰でどんなにか祈っていて下さったのだろう。大牧者に心から大感謝。）

とは言え、何しろ国吉先生はいづれ那覇へ帰られるお方と感じていました。「西南学院から帰って来られた名護先生を、うちの副牧師にお迎えしたいんだけど」と、国吉先生。「名護先生をお招きしたら、先生はさっさと那覇へ、でしょう。駄目。駄目ですよ」「いや、そんなことはないよ。今、名護先生に来て頂けば普天間はますます...」「...」で、名護先生いらっしやった、1962年初夏。教会の前、野嵩のアシビナーの崖の上に縁台を据えて、どっかと座って長い長い脚を片方台の上にのせて普天間の街を眺めている名護先生をみて、一辺で大好きになってしまった。大物。率直。楽しい。温かい。先生は、牧師仲間でも有力者よりもどちらかと言えば寂しい方々とよく付き合って居られた。「年寄りには苦手だね」なんて仰りながら、年配者もよく訪問していらっしやった。教会のボーイスカウトも出来た。ガールスカウトも応援した。タケ夫人（最近お会いした時、25年も前の保育児3人兄妹の名前を御記憶なのにビックリ仰天）と保育園も作った。普天間にとって初めての長期専属牧師だ。！（名護先生は今、城東教会牧師。エーカタの風格。）

「もう濡れちゃったよ、隊長。泳ごう」と安里班長（中学生・故人）。沖縄バプテスト連盟の今帰仁村キャンプ場（土地を買ったばかりで、建物・設備どころか外囲いも無かった）の海岸。テントで一泊後の朝食の飯盒を海水で洗い（あと清水をかける）に来てワザと転んでの嘆願。「どうします？」と上原俊彦ボーイスカウト・マスター（隊長）。「しょうがない、泳がせるか」と私。これで礼拝・勉強のプログラムはおじゃん...ああ。子供たち？ 勿論大喜び大騒ぎ。「でも、シャワーどうしましょう？」と隊長。水道なんて無い。困った。（仕方ない、部落まで歩かせて行って...あ、スクールだ！）「隊長、早く水から上げて石鹸で体を洗わせろ！！」折から何と、正に天与の清水。感謝。1966年夏。

私は、1967年春頃まで普天間でお世話になった。最も恵まれ楽しく過ごしたのは、他ならぬズッコケ落第信者のこの私に間違いはない。神様、先生方、兄弟姉妹の皆さん本当に有り難う。思えば普天間は、山路、シュワルツ、国吉、名護と、いづれも実によい先生に恵まれて来たのはなんという御恩寵でしょう。1955年の夏の伝道開始前から今に至るまで一貫、真心を以て歩み続けて来られた新里のお母さんの揺るぎない信仰を、神様が嘉されてのこと信じます。（お母さんいつまでも、皆んなの灯台としてお元気で。）そして今、普天間・新里信記念教会は、藤田久雄先生という又また素晴らしい方（先生がどんなに素晴らしい方かを知

る点で、私は人後に落ちない)をお迎えすることが出来て前途洋々！まことにおめでとうございます。(それにしても、あの頃の皆さんに会いたいなあ！！！)

1997年10月27日

宜野湾バプテスト教会会員 ケンちゃん(大河原健二郎)

(付記：文中の「週央夜」に「ママ」とルビを付けましたが、編集者の語彙不足であったらお許してください。編集者)

御名を賛美致します

新里 信

かねてから気になりながら中々かく事ができませんでした普天間バプテスト教会の40周年の思い出を、昔をしのびつつペンを取りました。話せば長くなりますけれど、照屋寛範先生とボーリン ज्याア先生が普天間に伝道所を建てませうと云うおみちびきを受け、当時普天間中学の音楽教室をお借りして始めたのが始まりでした。本土から山路先生と云う神学校を卒業したばかりの先生が礼拝を始めて下さいました。1959年9月だったとのこと、先日山路先生が教えて下さいました。それから現在のねは商店のうらにあった建物を借りてショウチ(シュワルツ)先生の牧会を大河原さんの通訳で礼拝が守られました。

間もなく教会組織にみちびかれ国吉先生ご一家をおむかえし、二年程今の教会でご用をして下さり、又名ゴ先生をおむかえし、先生がいらしてから今の二階も増築の労を取って下さり、長年名ゴ先生にはお世話になり、この度又藤田先生をお迎えし、よくやって居られます。感謝致します。

その間多くの人々を天に送り淋しい思いもしましたが、又おめでたい結婚式も多々ありました。

思えば長い年月、主のお守りがあつたればこそ今日まで祝され、保育園の園児達から年寄に至るまで守られ今日あることをひとえに神様のおかげと感謝致します。

これからも主のご栄光のためにできるだけの事をしたいと思います。

後になりましたがわ、私のすきなみことばを添えて

イザヤ46-3 胎内にいる時からになわれており、生れる前から運ばれた者よ、あなたが年取ってもわたしは同じようにする。あなたが白髪になっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なおわたしは運ぼう。わたしは背負って救い出そう。

あかし 40周年によせて

新里 信

主をほめたたえます。

案じていましたこの証、前々から書かねばと思いつつ、どうしてもペンを取ることができませんでした。

全てに時があると云われて居るように、やっと今日5月9日その時が来ました。年のせいもあつてか、いつも明方からはさめて、5時半になったら起き出し、ベットをたたんで着替えをし、朝の祈りに時間をかけるのが日課になって居ります。不思議な事に昨夜は5時までぐっすりねむり、おどろきと感謝に何度も神様有難うございますと叫びつづけました。祈りはきかれた。うれしい。今日こそはこの偉大なご愛にむくゆるためにも証をかくことにみちびかれペンを取りました。

若い時の貧困といしがしさからも解放され、今は毎日が感謝に明けて感謝に暮れる毎日を送らせて頂いて居ります。

無きに等しい存在をもあわれんで下さり、神にえらばれた身を感謝致します。

さて普天間教会の40年の思い出と云われましたが、何からかいていいやら、みちびかれるままに老いの身にむち打ってちょっとかいてみました。その前に私が信仰にみちびかれた次第をちょっとかいて見ますと、私は中城の久場、今の城東教会の所在地に生を受け、六人兄弟で五人男女は一人と云う生い立ちでした。日曜学校と云うめぐまれた場所に生を受け、小さい時から信仰の種は蒔かれて居ったことを思い出して感謝して居ります。

さて教会の始まりはと云いますと、正しい年月日はおぼえて居りません。ただ終戦直後といつも言っています。文字通り終戦のつかれて住む家は転々としておちつかず、たくさんの子供をかかえて、ことばで言えない苦労でした。上の子は一中鉄血勤皇隊で戦死、一番下の子は終戦当時に生まれ何とか命をつなぐことができました。

つかれ果てた自分はどうとう病気になり、夜もねむれず、毎日苦しみました。その時、神様は信仰にみちびいて下さり、信仰の友(今は亡き我謝姉)が前原で終戦の時牧会をなさって居る照屋寛範先生の所につれ

で行って下さり、先生に祈って頂いたのが始まりでした。

それから先生は那ハの久米町にうつられ牧会をなさいました。それからも那ハまで礼拝に通って居りました。これを見かねた先生は、或る時、新里さん、遠い普天間からはちょっと無理だから普天間に伝道所を立てませうと云われて、当時ボーリンヂャー先生と一緒に普天間中の音楽教室が許され、本土から山路先生をむかえ第一歩をふみ出し、今日に至って居ります。山地先生は一年で切られ、学校も校則により出来なくなり、今のねは商店のうらに小さい建物を借りて集会をしました。その時はアメリカのシヨーチ先生で、大河原さんの通訳で若い人がよく集まりました。それから間もなく教会組織がみちびかれ、国吉先生ご一家によって始められました。

国吉先生も間もなく那ハ教会の副牧師として行かれ、名ゴ先生ご夫妻をおむかえし、長い35年というおつとめをして下さり、今日に至って居ります。その間色々な事も起りました。名ゴ先生ご一家のご苦勞ものばれます。

長年の牧会生活には愛する信徒を天に送り淋しい思い出もありました。

思へば普天間小学校の校庭でボーリンヂャー先生の天幕伝道から始り、シュワルツ先生の時に大河原さんのお母さんが路傍伝道をなさったこと、遠い昔の思い出となりました。

神様はこの40年間普天間教会をお守り下さり、多くのたましいを救って下さったことを心から感謝致します。

これからも主のご栄光を表す教会として助けて下さることを祈りつつ、私のあかしとしてお捧げします。

最後にすきなみことばを

苦しみに会った事は私にとっていい事でした

そのことによって神のおきてを学ぶことができました。(聖書から)

(付記:「あかし」は、文中の日付から、1997年5月9日に書かれたことが分かります。 編集者)

教会40周年記念

新垣信子

神様は人々を救うためにこの地にも教会を用意なさいました。感謝します。

それから教会より左側の山はウタキ拝ん所もあります。まことの神様を知らなかった私も戦争中は拝んでいました。それからかえりみて、うちの家族は四名でした。主人、長男一中4年生、次男一中2年生でした。主人は県庁に勤めているところ、昭和17年に満州に派遣になりました。待遇もよく安定しているところ、いつのまにか戦争が激しくなって召集されました。そのまま帰らぬ人となり戦死しました。何よりあの学生達までも軍隊同様にあつかわれたことがくやしくてなりません。

それから私の場合、母の姉の家族共に野嵩の壕に避難していましたが、4月2日になってから友軍よりここから早く出て行くようにと云われたので、夜になってから出て、南へと向い進みました。また夜が明けたらどこに隠れようかと毎日その暮し、食べ物畑から芋、野菜などを取って食べる。もう6月も中ば頃になって具志頭の岩山に着いた。

戦渦の中からこんな遠い所まで皆、無事にほっとしているところ、友軍の兵隊さんが見えました。若い人たちは戦闘協力に出るようにと云われて、私と姪子三人、四人付いて行きました。炊事、負傷した人々の世話など。ところが何日かしてから敵は近くまでと。ここにも居ることはできない。夜は出て行きました。夜になったら人の足音によって火をぱちぱち飛ばす地下タビもはかれませんでした。

まもなく夜が明けた。どこにも隠れる場所はない。皆んなうずくまっているところ、敵軍の音がする。やれ来た。手さえ上げれば助かるのに、ヤマト魂はそれができなくて、残念でした。私の姪子三人も、其の場で即死、それから生き残りの私はヤンバルに送られる。そこで何ヵ月後になってから我家に帰ることができました。家には見知らぬ人達ばかりで、でもこの人たちもめいめいの島に帰ることができました。私はこれからそうすればよいか、よくわからない、ただ、途方にくれるばかりでした。

そのところ神様は新里さんを私のところにおつかわし下さいました。私はそのとき、素直になって、お導きを有り難く感謝しました。それから私は、毎週日曜日は教会礼拝に行き、その時から私の信仰生活の始まりです。1970年12月20日にバプテスマを受けました。

人の歩みは主によって定められる。人はどうして自らその道を明らかにすることができようか。箴言 20・24

名護先生、特に私みたいな信仰の弱い者をここまで育てて下さいまして感謝します。

(書かれた日付はありません。 編集者)

開拓伝道時代の普天間バプテスト教会

平 節子

40年もの記憶をさかのぼってなにかを書こうとするとかなり不確かな思い出になるかと思いますが、私にとってはっきり確かに言えることは、その時期に人生の基礎ともいえるイエス・キリストとの出会いがあったことです。それは、最初は教会ではなく、学校でした。

普天間中学が現在の場所に移転する前、小学校と中学は同じキャンパスにあり、普天間小中学校と呼ばれていました。中学1年の社会の授業でいつも、とても興味深いお話しをしてくださる先生がいらして、生徒はそのはなしに夢中でした。あとで解ったことですが、先生のお話の中味は聖書物語りの一部だったので、

また、丁度そのころ、普天間小中学校のキャンパスで、天幕伝道と称して伝道集会がおこなわれていました。好奇心とやじ馬的関心で大勢の小中学生がその集会に参加しました。「自然の神秘」と題して18ミリフィルムなども上映していて、テレビや映画が普通に見れない時代でしたので、私もかなり感動しながらそのフィルムを見ていたのを覚えています。また、驚いたことに、そこで宣教師の話されたお話しがどうやら学校の社会の先生のお話しと同じ聖書のお話しなのだと解りました。私も一緒に行った友人たちも聖書をもう少し詳しく知りたくなり、紹介されていったのが教会でした。

数人のクラスメイトと足をはこんだのがあの懐かしい、今ではとりこわれ、かげもかたちもありませんが、当時の普天間バプテスト伝道所なのです。伝道所は私たちの学校の建物から見える位置にあって、小さなバラックの木屋でした。狭い小さな部屋に大人も子供も大勢つめかけいつもいっぱいでした。当時の写真を見ていると、その木屋をバックに大勢のメンバーがカメラにおさまっていて、なつかい顔が浮かんできます。

中学生であった私たちにとって、普天間バプテスト伝道所と言う場は、聖書を学び、礼拝をし、信仰の成長の場であると同時に生活の場でもありました。そこで聖書以外の学びもたくさんあり、こころの通う友達をつくり文化的な体験をたくさんさせてもらいました。よくピクニックや、交わり会をもちゲームやうた、賛美歌をはじめ、あらゆるジャンルにわたり歌をうたいました。

中でも特記したいことは、中学2年生で、まだ十分信仰理解が成熟していたとはおもいがたいのですが、バプテスマをうけたことです。那覇バプテスト教会にて照屋寛範先生から受けました。

そのあとすぐに教会学校のお手伝いをはじめ、そのことが、聖書の勉強を必死にせざるをえないチャンスになったのです。教会学校には私と年齢のさしてちがわない、小学5、6年生もいて生意気な質問が出てきて苦労したのをおぼえています。でも、部屋がなく学校のキャンパス内を移動しながら行った分級はとても楽しいものでした。当時の教会学校のみなさんには大変幼稚な先生で申し訳ないのですが、私にとって、さまざまな訓練の場になったことは確かで、今でも懐かしい思いでと同時に感謝のおもいで一杯です。

というような状況で開拓伝道時代の普天間バプテスト教会のあゆみを共にした者のひとりとして、感謝をこめ、ささやかな思い出をのべさせていただきます、40周年の記念日を心からお祝い申し上げます。

おめでとうございます。

(年月日の記載はありませんが、藤田牧師の筆で、9月1日受付とあります。 編集者)

普天間教会の40周年にあたり

安里八重子（宜野湾志真志）

40周年記念にあたり何か一筆との事で、目を閉じ静かに40年前の事をさかのぼると、遠い昔の様で、今更ながらこんな年になったのかと思います。

普天間小学校の近くのネハ商店の片隅に、小さなトタン葺きのドブ臭い所で十名にも足りない人々が、熱心に牧師の話を聞きに日曜ごとに、子供たちと一緒に出掛けたものです。あの頃は牧師も教師も少なく、アメリカの先生方が、時々見えて居ましたね。

大きな戦争も終わり、人々の心もようやく落ち着きはじめていた折り、子供達を連れて遊びに行くところも無く、教会はどんな所かしらと、ごく自然に行ったものです。現在の教会になってから先人達の、ご苦労が有って、土地を買い教会を建立するに至りましたが、名護牧師も若くしてご苦労なされた事でしょう。鍬入れ式には私たち夫婦も出席していたことが昨日の事のように、思い出されます。私ども夫婦も35年前、波の上の海岸で洗礼を受けて神様とお約束もしましたが、何の理由も有った訳でもありませんが、なんとなく毎

日の生活に追われ、だんだん教会から離れてしまい罪の意識も無いままに、礼拝も守らなくなってしまう毎日になってしまいました。

あれから何十年たったのでしょうか、喜び悲しみを繰り返し、人生当たり前の事を重ねてようやく、我にかえり、年を取ってしまい、わが家にもどったような次第です。

昔の信仰の友達はほとんど昇天され、現在お元気で堅く信仰生活を送っておられるのは新里ノブ姉只お一人となってしまい、淋しい気がしております。神がお約束された天国が有るとすれば昇天された方々はじかに神の御前でさぞ、若いまま楽しい事でしょうと思います。人間てはかないもので今まで何をして来たのか、日曜ごとに神の前で、恥ずかしく後悔の念でございます。

我が普天間教会は名護牧師のご恩もあります。時代は移り変わり、新しく藤田久雄牧師をお迎えし、私共も残された、歳月を牧師を中心に良い羊になるつもりですが果たして、どこまで出来るのか心掛けだけはあります。

神様から呼ばれる日まで、頑張っって昇天のあかつきには、夫や親、妹、弟達また友人達と相まみえるのを楽しみにして、我が普天間教会を支えていくつもりです。心からそう願って居ります。

どうぞ神様長い間の御無沙汰をお許し下さい。終わり。

(年月日の記載はありません。 編集者)

創り主の御手の中で

上間聡美

私が普天間バプテスト教会と関わりを持ちましたのは、保育園でした。それ以前に祖母がすでに教会員であり、両親が結婚式を挙げさせて頂いたことから、その関わりは「誕生前から」と言えましょう。

当時の保育園は、すみれ、たんぽぽ、ひまわり組さんの3クラスで先生が愛情深く、やさしく園児たちの世話をしてくれていました。運動会も、教会下の広場で、親子ゆうぎや、玉入れ、かけっこなどしたことを記憶しています。

卒園してからは、教会学校に通いました。お話しの内容はよく覚えていませんが、先生がたのお話しが上手だったことや、賛美歌などはよく覚えています。

また降誕劇や、近くの山に登ってイースターエッグ探しをしたこと、夏のキャンプなどは印象深い思い出です。熱心に通ったわけでもなく、神様のお話しを真剣に聞き入っていたわけでもありませんでした。しかし、今振り返ると、神様は保育園、教会学校を通して、私の無意識のうちにご自身の存在を魂に刻みつけて下さいました。

中学に入り、部活に熱心になり、教会からも足が遠のいてしまいました。けれども同じ部活に入っていました名護（外間）頼子姉は、忠実に日曜礼拝を守っておられ、「さすが牧師の娘だなあ」と感心していました。

高校に入り、再び通い出すようになりましたが、名護先生の高度な内容のメッセージは、信仰のよちよち歩きの私にはとても難しく、他の事を考えたりしている有様でした。そのような者も神様は憐れんで下さり、「私は神様を離れて生きる事はできない、神の家族の一員に加えて頂きたい」という思いを与えられ、高3の4月にバプテスマを受けました。比嘉さん親子と共に兄姉の見守る中、久場先の海で受浸しました。

又、中学か高校か定かではありませんが、中高生や若い教師、伝道師の先生方が中心になって企画、運営された「ゴスペルフォーク大会」も盛んに行なわれ、皆で練習して出場し、楽しく交わり賛美したことを覚えています。

バプテスマを受けた同じ時期に、九州の方で学びを終え帰郷された、石川（現沖吉）博美姉が教会員に加えられ、青年会を大変盛り立てて下さいました。神谷兄も大変熱心で、二人に支えられて、教会員としての信仰生活のスタートができたことは、本当に主の備えであったと感謝しています。金曜日の夜に青年会があり、一緒に学んだり、祈ったり、市場の前や高校周辺でトラクト配りをしました。又、日曜の礼拝後にも交わり会や愛の村訪問などを石川姉が積極的に計画、行動し、私達を引張って下さいました。そのような経験を通して、福祉の道を志すようになり、大学進学の為、千葉の方に導かれました。そこで私は、思いもよらぬ試練に会いました。けれどもそれは神様のご計画でした。それは私を霊的に覚せいさせるためでした。

千葉に導かれたバイブルバプテストの教会で献身に導かれ、神学校で学び、現在、教会に仕えさせて頂いておりますが、普天間教会で培われた信仰の土台があつて今に至っていますことをあらためて証しするものであります。

「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」 第1コリント13章13節。

この御言葉を普天間教会の先生方、殊に保育園、教会学校を通してお世話になりました名護タケ先生、末吉初子先生に、言葉ではなく、心と笑顔をもって教えて頂きました。その信仰のバトンをしっかり世代に伝えていく者でありたいと願っています。

貴教会がますます主のみ栄を現す器として用いますようお祈り致します。
(年月日の記載はありませんが、藤田牧師の筆で、9月1日受付とあります。 編集者)

40年記念誌あかし

喜友名京子

私は9年前(1990年)までは、屋富祖に住んでおりました。近くに教会があって好奇心にかられて、早速教会へと導かれました。

その時与えられた御言葉はヨハネによる福音書3章16節

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである、でした。そして普天間に引越してきて今まで、あまり信仰には無関心でした。

水曜日の家庭集会には、新垣姉妹、新里姉妹たちの熱心な働きかけによって、何気なく参加しました。最近のことですが、家庭の事情があって、新聞配達を朝と昼と始めたことで疲れというのか、気持ちが落ち着きません。それで家庭集会で学んでいる所を読んでいくと、ヘブル人の手紙13章5節、

金銭を愛することをしないで、自分の持っているもので満足しなさい。主は、「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われた。

この御言葉のように、神様の深い愛を知りました。すると、主人が朝の配達をすることになり感謝でいっぱいです。

伊波トヨ姉の思い出

城間啓子

1958年12月上旬、私は初めて沖縄の土を踏んだ。先ず目に飛び込んできたのは米兵の姿。「あっ、此処はアメリカの土地になっているんだ」と、改めて本土(当時は内地と言っていた)とは違うことを認識させられた。次に驚いたのは12月というのに半袖姿に人が多いこと。

数日後、主人に託された伝道所、コザ室川へ。この伝道所は、今は亡き大浜孫良先生が嘉数バプテスト教会牧師として兼牧しておられたものを城間に託され(今はない)た所で、台風の為に屋根も壁も飛ばされ、骨組みだけの青空教会堂だった。伊波姉と出会ったのは、その会堂の道向かいに借りた小さな小さな何もない我が家である。伊波姉は嘉数教会の熱心な信徒で、ご自分の畑で作ったお花を持って米軍基地内の家々に売って歩いておられた。その持って生れた気さくな性格と明るさと大胆さで好評を受け、よく売れたようである。主人とは嘉数教会で出会い、私が行く以前から良き相談相手だったとのこと。それで室川の我が家にも時々立ち寄って下さるようになった。或る時、私がレース編みをしているのを見て伊波さんは、「これ売ったらどうねー」と言われた。「えっ、売れるんですか?」私は驚いた。人に上げたことはあったが売るなんて考えたこともなかったから。「アメリカ人の奥さん達はこんなのが好きさ、だーだー私が高く売ってきて上げるよ」と云って、テーブルセンターや花瓶敷き等数枚持って行かれ結構いい値で売れて一時的ではあったが私たちの貧乏生活にはづみがついた。沖縄に来たばかりで何もわからない私のことを気づかって伊波姉は何かと良くして下さいました。小さな体でアッハッハと豪快に笑い、方言混じりの独特なおしゃべりが楽しく、いつも私達に活力を与えて下さる存在だった。しかしその楽しい伊波姉とは一年後にお別れすることになった。

私たちは首里バプテスト教会の要請で宮古島の開拓伝道につかわされた。そして首里教会、再び宮古、と四十数年が経ち、私たちが沖縄本島に移り住んだ時には既に伊波姉は老人施設に入居の身になっておられた。宜野湾の福寿園に時々お訪ねしたがベッドはいつももぬけの殻で、車椅子で動き廻り食堂で入居の方々とおしゃべりをしておられ、昼食時やおやつの時間に行き合わせる時には、いつもご自分のものを「ハイハイ食べなさい」とすすめて下さる。そして「ヒーヤサッサ」と手を上げて踊り、手を取ってチューをされる。ほんとに陽気なおばあちゃん、その独特なお声とアクセントが今も耳の底に残る。晩年、大分弱ってらっしゃると聞き乍ら、お訪ね出来ないまま天に送ってしまったことは、大変申し訳なく、残念でならない。今はイエス様のお側で楽しく踊り、歌い、過ごしておられることでしょう。

証し

高木初江

「ストップ!温暖化!」との声が聞かれる今日この頃です。空を見上げると沖縄の空は青く広がり、大空は御手の技を示しています。「野の花を見よ。空の鳥を見よ。蒔かず、刈らず、紡がない。明日の事を思い煩うな。」との御言葉が思い浮かびます。人は絶望しては生きられないと思います。キリスト教は希望の宗教、待ち望む宗教だと思います。「なぜ、教会へ行くの?」との娘の質問に返答できず自分の信仰を自分の言葉で言い表すのは難しいです。死ぬのが怖いから。」「たったそれだけ?」で会話は終わったのですが、

中学2年生の頃、友人に誘われて教会へ行き始めました。1972年12月、岐阜バプテスト教会で、バプテスマを受けました。私の信仰告白はとても貧弱なものでただ「キリストを信じます。」のひとことでした。高校3年生の夏休み（東京オリンピックの年）に母親が入院しましたので、「母を無事に帰して下されば、神を信じクリスチャンになります。」と祈ったとは言えずじまいでした。取引の様な祈りに後ろめたさを感じたからと思います。母は元気で85歳になります。息子2人は交通事故を経験しています。相手側のミスで、命は助かりました。教会で祈りを求める事は出来ずにいました。母の事も息子達の事も助かるべくして助かったと思ったりしましたが、やっぱり神様が守ってくださいました。

岐阜で親しくして頂いた澤田さんは、「自分達に対する感謝の気持ちがあるのであればその気持ちを他の人に返して上げなさい。そしてなるべく離婚はしない様に。」「どうして高木君と結婚する気になったの?」と尋ねました。クリスチャンホームを作れば教会へ行けるから。」と言えませんでした。クリスチャンホームは私の方が消極的で失敗しかけています。どうぞ高木家のためにお祈りください。1997年、家族で岐阜へ帰りました折に思った事があります。岐阜教会での暖かい交わりが身に沁みて嬉しく、この交わりを続けるためには教会へ行こうと思いました。半ば習慣で通っているような気もします。我が教会の会堂建設のローン返済が出来ます様に祈る者です。またいつの日か天国へ帰る日も来ると思います。その節には簡素でお願いします。好きな讃美歌はドイツミサの232番です。

短歌

比嘉昭子

証し 主に生きる

比嘉昭子

ちょっとだけ話をしたいと思います。

今朝、目をさますと同時に「神様イエス様、新しい朝を有難う御座います」と挨拶をした。いつの間にかその言葉が目ざめと同時に出了素晴らしい朝、新しい朝を感じる事が出来た。

ただそれだけの事なのです。

でも私にとっては、とても大きな喜び恵みなのです。と申しますのは、いろんな難病を背負ったが故にあまり素晴らしい朝を感じた事がなかったような気がします。それ故朝の素晴らしさをとても幸いに思う。

私の庭にとっても大きな松の木があります。風にさそわれて耳元で松風がザワザワとすずしげな音を立てながらよぎった。私は感じた素晴らしいなー、さわやかだなーと思いながら、生きていてよかった、このさわやかさを感じる事が生きている証なんだなあーと再び主に感謝をした。

普通ならば夜が来れば朝が来るのはあたりまえでも私にはとてもそうは思えなかった。

夜が明ける度に今日も生きられた。そして生かされた。その日その日を生きぬく事が感謝だった。不治の病を背負っているが故にいつも苦しい痛い情けないと言う思い。それだけに気持のいい朝にはすぐさま神様有難うから始まる。そして今日は皆様との出会いもしたし、感謝に耐えません。

私達の母もすごい信仰の持ちぬしでした。私はほんとに幸いに思います。でもいつしか結婚後体が弱くなり、今ではとても信仰なしでは生きて行けません。今はすべてを主にゆだね、ただ主に生きるのみで御座います。

それゆえ思う事とは異なり、いつでも体調がすぐれません故、あまり礼拝に行けません事もとても残念に思います。時には何度もため息をし絶望し、信仰ってなんだろうと思った事も幾度。独り言を言いながらふと我に帰り、私ってなんと罪な事を、おそれおおい神様に愚痴などをと悔い改め、ごんげをし許しをこうた。あらためて自分の弱さをなじった。

そこで信仰に生きるってどんなに力強く尊いものであるかを知りました。

いざと言う時には祈りしかない。これからも私は娘や孫達にも信仰の尊さや心のより所である事を宣べ伝えて行きたいと思います。

会堂建築に与えられた恵み

又吉弘子

屋富祖教会から転籍してはや、八年を迎えます。その間、神様から多くの恵みをいただき、やっと少なからずも、ご奉仕をすることができるようになりました。そして信徒たちとの交わりを通して教会生活を楽しく過ごすことができるようになったことを神様に感謝しています。

家を新築するため宜野湾市に住所を移転し、近くの教会へと考え、そのとき藤田栄子先生を知り、普天間教会へ足を運ぶようになりました。

そのころの普天間教会は建物が古く、急な階段が週ごとのネックになっていました。会堂建築もそのころから少しづつ耳に入るようになり、建て替えの時期がきたことを感じていましたが、毎月の献金の状況や信徒の定着の変動が見られる教会に果して会堂建築が進められるのであろうか、と疑義に思っていました。と

ころが建築委員会が発足され、それが現実に向けられ、その都度の報告がされるようになってきますと、新築は自からも経験を踏まえていましたので、会堂はまだ使えるのに、せめて献金が増えてから、遅くないのでは、とか、考えるようになり委員会の報告に気乗りしませんでした。ところが設計の段階まで進んできずと他人事の用に思えなくなり、それを重く受け止めるようになりました。それで意見をのべたり、設計のことを考えたり、忙しい中での実行委員の働きを考えることなく頭だけの行動に走っていました。ところが委員の身体の不調などを耳にしますと、それが自分たちの問題に思えるようになって、はじめて神様に祈るようになりました。神様には不可能なことはない、祈りはきっと聞いてくださる。

教会では度あるごとに祈りの集いをもつようになりました。それが会員の活性につながり、引っ越しなど、いろいろな面で建築はスムーズに進むようになりました。そして普天間教会に奇跡が起きました。祈りの答えが与えられたのです。私は日々の祈りのなかに生活以外の収入が得られたらみんな会堂建築に捧げます、と祈りました。すると、いまだかつて一度も経験したことのない賞金（五万円）が当たったのです。神様は私の祈りを聞いてくださったのです。そのときほど神様を身近に感じたことはありませんでした。普天間教会の建築はこうした予期せぬ献金が色々な方面から与えられ、教会は人によって造られたものではなく、神によって造られたものであると言う御言葉が生きて働いたのです。いまは緑の深い森を背に、白い十字架が天に聳え立つ教会に建て替えられ、会堂には神の栄光がいっぱい射しています。

50周年に寄せて

宮城明美

主の聖名を賛美いたします。

2008年私は還暦迎えました。60歳です。となると私が10歳の時に教会が組織されたこととなります。

思い起こせば普天間で育った幼少期小学校に醤油屋さんの一角の家(伝道所)に行ったこと、中学校で礼拝があったことなどうっすら記憶があります。布に書いてあった讚美歌いつくしみ深きなど歌ったこと、また那覇教会にも参加したことなどだんだんとよみがえってきます。

中学生高校生と教会から離れていき、短大が沖縄キリスト教学院短大へ進むころから教会へつながって来ました。

卒業して本土の教会関係の幼稚園2年して帰ってきてから教会（ゴヤバプテスト教会）に就職。それから実家の近くということで普天間の教会へ通うことになって36年です。

神様は私のような迷える羊でも受け止めてくださることに心から感謝しております。私はいままで息子の大きな事故など多々ある出来事が自分を試されていること、常に祈りまた多くの姉妹から祈られていることを感じます。

ある方が普天間の教会には名護先生、ランドール先生、藤田先生がいらっしゃる。神谷先生も受け継いでいらっしゃると。平和に対するメッセージがこの教会の歴史と共に受け継いでいっていることだと思います。

これからも主の家の兄弟姉妹たちと共に歩んでいきたいと思えます。また家族が救われ教会の礼拝を守ることができるように祈っております。

キリストのうちには、知恵と知識との宝がいっさい隠されてている。コロサイ人への手紙2：3
あなたには、わたしがついている。使徒行伝18：10

主の導きに感謝

大江田昌子

私が香椎バプテスト教会をはじめ訪ねたのは、沖縄の孫（黎子）が、福岡女学院に入学して毎週教会に行くことが学校の方針なので母親と相談して、近くの香椎バプテスト教会に行くことにしました。

早速四月から毎週孫と一緒に教会に行き、主の御言葉の説きあかしを聞いた時は緊張して感動を覚えました。聖書は娘から還暦祝に貰いました。少しずつ読んでいきましたが深く感じるころまでは中々分かりませんでした。聖書は心がけて読む様になりました。

孫が教会に行けなくなりお休みしていた時、教会の献堂式の案内を頂きました。久しぶりに思いきって教会に出席しますと、教会の方々には優しく迎えて下さり、ほっといたしました。主の導きに感謝して豊かな恵みを感じて帰ることが出来ました。家庭集会のお誘いを受けて出席し森山健也牧師夫妻や姉妹に迎えられ、聖書の学びとお交わりが楽しくなりました。教会へもだんだん行ける様になり心が清められる思いでした。

聖日礼拝の日に、ホスピス病棟に入院の姉妹が、バプテスマを受けるために証しをされました。医師と看護婦さんに伴われ、車椅子に乗って来られました。余命幾ばくも無い方が、母親と息子の事を神に委ねますと証しされました。私共は涙して聞き感動いたしました。クリスマス燭火礼拝にはじめて出席して、聖句を一節ローソクの灯に照らされて読む機会を与えられました。主のお恵みを心から感動して、バプテスマを受

ける決心がつかしました。

私は1998年4月12日、イースターの日に、七十歳にしてバプテスマを受けました。主人や娘、息子、孫、お友達も花束を持って駆けつけ、祝福して下さいました。この時普天間教会のW・T・ランドール牧師と藤田久雄牧師より祝電を頂きました時は、何よりの感謝でございました。主の導きにより、聖日礼拝、家庭集会、祈祷会の時が与えられる様になり、森山健也牧師はじめ兄弟姉妹のあたたかいお交わりに恵まれました事を心から感謝しています。

主人が八年前に亡くなり、三年余り一人暮らしをしていましたが、八十路を前に、老いを感じる様になり、福岡で五十余年暮らした色々な思い出を胸に、沖縄の娘の家庭と同居することになり早五年が過ぎました。

沖縄に来てはじめて、普天間教会のイースターの日泡瀬公園で礼拝があり、家庭で出席する事が出来ました。W・T・ランドール牧師夫妻、竹内夫妻に出会い、はじめてなのに優しく声をかけて迎えて下さり、他の兄弟姉妹や、故桃原静姉妹は私の両手を握って、「よくいらっしやいました。」と喜んで下さった時は、涙が出る位嬉しく思いました。何時も元気ですかと心をかけて頂きましたことを憶い出し感謝です。

神谷武宏兄弟が、西南学院大学神学部に入學の際、W・T・ランドール牧師と神谷家も一緒に、福岡の香椎教会へ（私の母教会）を訪ねて下さって、森山健也牧師とお話して下さいました事は、私にとりまして、何と有難い事で身にあまる喜びでした。感謝でいっぱいです。

普天間教会へ転籍して娘と一緒に、毎週礼拝に出席できますことは何よりの恵みです。毎週礼拝前に、分級は城間啓子姉妹を中心に聖書教育の本を学んでいます。少しずつ深く分らせていただけて嬉しいです。

神谷武宏兄弟が神学校を卒業されて、牧師に迎えて按手礼の式に参加でき、主のお恵みを深く感じて、主は何時も私達に賜物を授けようとしておられる、私たちはそれを体いっぱい、いただいて生きていくことが大事だと思います。どうか信仰が深まります様に、導いて下さいと祈る毎日です。

八十路に入り、老いてくる現実を、みつめていきたいと思っている時、ホイベルス神父の「此の世の最上の業」を読んで、長生きし、生命を全うする事だけでは老いの日々を満ち足りて生きる事はできません、十字架のイエスこそ主の救いであることを信じて仰ぎ、その彼方から射してくる復活の光を見る時、人はいかなる境遇にあっても満ち足りて生きる事ができるのです（ピリピ4章11節－13節）老いの重荷は神の賜物と受けとめはできなくなっても、「神は最後に一番よい仕事を残して下さい」それは祈りだ。そしてすべてをなし終えたら、臨終の床で神の声を聞くだろう。「きたれ、わが友よ。われ汝を見すてじ」（ホイベルス神父）これこそ幸せな老後であり「此の世の最上の業」であると示して下さいました。

毎日の生活を主の導きによりお恵みを感謝して、お祈りしていきたいと願っています。

普天間教会の五十年を祝して、主のみ業を心にとめて、教会に導かれて、み言葉を聞き、学びと祈りと、お交わりが豊かにあります様に、楽しく出席することができますことを心から感謝しています。

此の世の最上の業はなに
楽しい心で年をとり
はたらきたいけれども休み
しゃべりたいけれども黙り
失望しそうな時に希望し
従順に冷静におのが十字架をになう

若者が元気いっぱい歩むをみてもねたまず
他人のために働くよりも謙虚に人の世話になり
弱ってもはや他人のために役立たずとも
親切で柔和であること
老の重荷は神の賜物
古びた心にこれで最後のみがきをかける

まことのふるさとへいくために
おのれをこの世につなぐ鎖を少しずつ
はずしていくのはまことにえらいしごと
こうして何もできなくなえば
それを謙遜に承諾するのだ

神は最後に一番よい仕事を残して下さい
それは「いのり」だ

手は何もできないけれども最後まで合掌できる
愛するすべての人の上に
神の恵みを求めるために

すべてをなしおえたら
臨終の床で神の声をきくだろう
「きたれわが友よわれ汝をみすてじ」と

ホイベルス神父

導かれていたランドール牧師との出会い

上里健次

きっかけは些細な事でしたが、それはまさに私自身また私の家族にとって、運命的とでも言えるほどの偶然的な出会いでした。1978年の夏、福岡空港の待合室で、手持ちぶたさそうに座っておられる、知的な風貌のアメリカ人の紳士を見かけました。私も時間にゆとりがありましたので、声をかけてみることにしました。確か **Excuse me, may I talk with you** が最初だったかと思います。このノーブルな感じの紳士がランドール牧師で、折からの台風の影響で、沖縄行きの予定のフライトが遅延している、また韓国からの復路の途中だと話されました。

当時の私自身といえば、琉球大学赴任後7年目のことで、たまたま文部省派遣による海外学術調査に関わっていた時期です。熱帯高地に分布しているはずだが、ほとんど情報のないマレーシアジャクナゲに関する調査研究がそれです。パプアニューギニアで2ヵ年をかけた予備調査、本調査が進行中で、その2年目の本調査出発の直前の時期でした。九州大学での用件をすませて帰沖する際の、福岡空港での出会いでした。

また当時は、海外に出かける機会が多くなって、首里龍潭池の横にあった語学センターの英会話のトレーニングになればと、思い切って声をかけたことが、その後の人生の一つの岐路になったように思います。

普天間教会の協力牧師で、浦添市前田にある住宅で夫婦二人で住んでいる、沖縄に住むようになって10年程たっている、若い人たちのアジア研究会のグループをサポートしている、バプテストの牧師を中心に友人、知人も多い、ことなどを知ることができました。私も当時は近くの、浦添市広栄の民間のアパートに住んでいたのも、後日訪問しますとあってその時は別れました。

帰沖後しばらくして、電話でアポイントメントを取って、浦添前田の見晴らしのよいお宅を訪問しました。ランドール夫人が出でこられて顔を含ませた途端、あれっと思ったことが思い出されます。その時は英会話のクラスはすでに終了していたが、語学センターの英会話上級クラスに通っていた時、担当の女性講師の代わりに数回、代理の講師をされた先生その人だったのです。小人数のクラスでしたので、私自身を覚えておられ、その後の会話が弾んだように思い出されます。

妻芳子はキリスト教系の大学、自由学園を卒業して、婦人之友誌を発行している全国友の会支部となっている沖縄友の会の、設立時からのメンバーです。沖縄に来た当初から教会に行くことを考えていたようで、ランドール牧師が近くにおられる話をすると喜んで、早々に訪問することにしました。誕生後一歳をすぎたばかりの、乳児の黎子も連れて行きました。

何度かの訪問後、志真志の緑が丘伝道所を紹介され、日曜ごとのランドール牧師の教会ミサに、親子3人で通うようになりました。一方で、当時は毎週土曜日にはオープンハウスがもたれ、これにも週ごとに参加するようになりました。そのころの数年間、確か私の出席はほぼ皆勤で、出席率は私が一番良かったと思います。一人だけの出席ということも多く、ご夫妻二人を相手に英会話のみの対応に苦慮したことが思い出されます。

その頃は、世界の秘境といわれるパプアニューギニアに予備調査、本調査と約3ヶ月間の調査旅行を終えたばかりで、現地部族の不思議な生活習慣、各地域で変化の多い気象環境、豊富なランと珍しい熱帯植物等、話題には事欠かなかったことが良かったことです。

私の少年時代の一時期は、石垣島東北部のマラリア地帯といわ、馬車道さえもない山中での生活でした。この地域はその後に、沖縄北部からの第1次開拓移民団の入植場所の隣接地で、私の家族もその開拓移民団に加わることになり、日常生活、学校生活に種々の体験をさせられたこととなります。現在では考えられない程の、子供目にもどん底の毎日でしたが、これは今では懐かしい思い出となっているものです。単級学校は現在では死語になっている言葉で、小学学校生徒全員で30人未満、先生一人の分校でしたが、その小さな学校の体験者であることは、これはまた他面で、きわめてユニークなことといえます。ランドール牧師も

幼少の頃は、ジョージア州の片田舎での生活を送られたようで、いくつかの共通点もあって、オープンハウスでの話題は多岐多方面にわたり、英会話のトレーニングは毎回楽しいひとときでした。

また当時は1、2年後に文部省による海外長期研修で、ハワイ大学に行くことがか決まっていたことで、英会話の習得には一段と熱が入っていたことが思い出されます。この研修の中で、ブラジル、コロンビア、メキシコにおける野生ランの調査旅行も予定していた頃です。

話は前後するが、志真志のコイノニアハウスに行きだしてしばらくの後、妻芳子はバプテスマを受けることになり、その一通りの教育指導を受けた後、中城の海岸で洗礼の儀式を受けました。その後またしばらくして、ランドール牧師の勧めもあって、月一度の家庭集會も持つようになり、この集會はその後十数年も続いたこととなります。

1983年、1年半のハワイでの研修を終えて掃国した後も、日曜礼拝には親子3人で出かけ、またオープンハウスにも真面目に通い続けました。オープンハウス通いで一つ良かったことは、大学のガラスハウスで研究調査用に育てていたランがかなりの数あって、花の咲いた鉢花、切り花を訪問する度にもって行き、鉢花は開花後にまた別の種類に取り替えてご夫妻に楽しんで貰ったことです。これは5、6年続いたと思いますが、その中で一度は、ランドール牧師のお母様がアメリカから来られた時は、20数輪のカトレヤの切り花を持参し、最高の喜びだったと話されていたことは、彼女の逝去後も何回かお聞きしました。

妻芳子が普天間教会の教会員となって以来、教会内の種々の係りを受けて役目を果たしている一方で、私自身はそのサポートのみでしか、教会に協力しておらず心苦しい面もありますが、このような手記をまとめて、教会員と同様の扱いを受けられることに感謝しております。

思いつくままに種々のことを書き連ねましたが、私たち家族に対するランドール牧師の最後の大事な仕事は、この2008年7月に、乳児の時から何かと成長の過程を見守っていただいた、娘黎子の挙式で、司祭のお役目をしていただいたことです。名護のグセナリゾートホテルでのその日は、夏の日差しが照りつける中、目が不自由になっておられるにもかかわらず、ルーペを通してのお言葉には、頭の下がる思いと感謝の気持ちがいっぱいでした。

私自身と私の家族に対し、常に暖かいお気持ちで接していただいたこと、英会話の習得を初め、多くの英文の添削校正、また人生の生き方に対する示唆、助言等に対して、心底からの謝意を記して、この普天間教会記念誌発行への、教会協力員の立場からの貢献の一つにしたいと思います。

奇妙な証し—反語的クリスチャンとしての私—

竹内 豊

私は自分が正統的なクリスチャンだとはとても思えないので、証しらしい証しをしたことがありません。処女降誕や復活の物語はともかく、終末（世の終わり）・再臨（最後の審判）となると、そのビジョンは気宇壮大ではありますが、一方であらぬ妄想を掻き立てる「危険思想」でさえあるという思いを禁じえず、私にはとても馴染めません。それに私の死生観はキリスト教的というよりも、インドの梵我一如思想のような、大宇宙と小宇宙（存在）の連続性、「大きな命」に包まれた「小さな命」というイメージにずっと近いのです。

そんな私が「クリスチャン」として長年教会に居続けることができたのは、ここが私にとってほとんど唯一の親しみのある「社会」であったからですが、ただそれだけではありません。私は、グローバル化した現代の世界の只中であって、キリスト教は依然として世界の制度的な基盤になっている、と認識しています。資本主義という経済制度も、その根源にはユダヤ・キリスト教が関わっていると言われますし、とりわけ私たちに親しいプロテスタンティズムは、資本主義の倫理的基盤をつくったと言われていました。もちろん世界の制度的な基盤をつくっているのはキリスト教だけではありません。しかし、私たち地球に生きる人間が、否応なくキリスト教が作り出したシステム（制度）のうえに、存在（生存）せざるをえないという「現実」があるのも事実です。

私はクリスチャンであるにもかかわらず、キリスト教に対してはシビア（冷厳）です。私は、キリスト教に対して、希望を抱くと同時に失望し、失望すると同時に希望を見出します。キリスト教は平和の原理の供給源であると同時に、戦争の原理の供給源です。どちらか一方がキリスト教なのではなく、双方がキリスト教の矛盾であり盾です。キリスト教の矛盾が世界の矛盾に反映し、同時に世界の矛盾がキリスト教に反映しています。

そう認識している私に、阿波根昌鴻さんの言葉は実によく響きます。「アメリカ（軍）人と交渉するときは、キリストを前に出すとよい。キリストの後ろに隠れていると、キリストが闘ってくれる。」じつに含蓄に富んだ言葉です。

ハイデガーという哲学者は、人間の存在の仕方を「世界内存在」と表現しましたが、私はこれを「キリスト教世界内存在」と理解します。阿波根さんの言葉は、これを自分の言葉で的確に言い表したものです。人間の存在を否定なく規定するキリスト教という世界制度、その同じ存在構造のなかにあつて、「兄弟」として、暴力をもって暴力を制すのではなく、非暴力（愛）をもって暴力（罪）を制すのです。既成の教会に属さなかった阿波根さんが、自らを「クリスチャン」と称した意味はそこにあります。

私はランドール先生や名護先生のあり方をみて、イエスの福音が、ただただ教会内の平和にとどまるものではなく、社会の平和、世界の平和につながるものであることを教えられました。同時にそのような先生が、「社会派」として教会内に存在しなければならない福音理解の狭さにも疑問を抱きつつけています。とりわけランドール先生の宣教師職解任を認めた沖縄バプテスト連盟には、未だに疑問符が三つも四つもついています。

いずれにしても終末にも再臨にも馴染めない「反語的クリスチャン」ですが、私には強い信仰も意志もないの代りに、とくにクリスチャンであることを降りる意思もなく、今日まで来ました。その間に兄弟姉妹の去来を見てきました。人は様々な事情で教会に来て、また様々な事情で去ってゆきます。私にも今後そういうことがあるかもしれません。しかしキリスト教から逃れることはできないという認識は変わらないでしょう。

2008年7月17日

自分史

安里正昌

現職 教育家、宗教家、自営業（農業）、新垣老壮会会長
元職 具志川市高江州中学校教諭
年齢 昭和15年5月1日生
沖縄県中頭郡中城村字新垣158
電話098-895-2970

父山昌と母カナの二男として中城村に生を享け、琉球大学農家政工学部総合農学科卒業。

越来中学校を振り出しに普天間中学校、山内中学校、美東中学校、嘉数中学校、宜野湾中学校、安岡中学校、安慶田中学校、高江州中学校で教鞭を執った。「真面目、誠実」を教育理念として生徒の指導育成に38年尽きぬ情熱を傾け、平成13年3月定年退職。

在学中を顧みれば、普天間中学校時代に生徒と共にアマチュア無線の免許を取得したことが懐かしく思い出される。又、校内マラソンにも生徒と一緒に走ったことが脳裡に浮かぶ。

美東中学校では授業に力を入れる傍ら、テニス部の指導にあたり男子選手が名嘉杯テニス大会に出場して見事優勝。常に努力研究を怠らず教育に取り組み、その間に高校二級（農業）教員免許も取得した。

嘉数中学校在職中は全日本中学校技術研究大会に役員として参加し、同大会を無事行なったことが印象深く残る。部活動では女子ソフトボール部の顧問を務めた。

新設校の宜野湾中学校でも研鑽を重ねながら教育指導に取り組み、新しい中学校の基盤づくりに力を尽くした。同校在職中に一種工業高校の教員免許取得。題42回国体の花づくりもした。

安岡中学校では、学科指導や学級指導、美化主任も努めて多忙な毎日を送り、創立50周年記念事業にも取り組んだ。

退職後は書道を嗜み、地域活動にも携わって活躍中。

書道は越来中学校在職中、宮城嘉守先生の指導を受けたのを機に精進努力し既に四十年。高江州中学校在職中に書道塾に学んで四段となる。その後、五段に昇段し（教授免許）、現在六段を目指す。

新垣老壮会会長に就任して3年目となり同会運営に尽力。

会員の健康と親睦融和に留意し毎年6月・11月拝所の草刈り奉仕作業、毎週火・木・土曜のゲートボール等、各活動を行なっている。

平成17年8月開催された中城村老人クラブ連合会の第25回輪投げ大会で新垣老壮会が団体優勝、氏が個人優勝を飾った。

この大会での活躍の様と結果は日刊紙でも紹介された。

座右の銘は「人間・神の子」。

趣味に書道のほか、読書、音楽鑑賞を楽しむ。

カズ子夫人（元美容師）。長男盛孝氏（高校教諭）、二男昌和氏（養護高等学校教諭）。孫二人。

付記

1963年 ボーリンジャー牧師によってバプテスマ。
1972年 名護良健牧師の司式で普天間教会で挙式。
1997年 空手初段。
2006年 書道七段。

神様ありがとう

仲松あかり

私は、クリスチャンホームで育った事を、とても嬉しく思っています。

クリスチャン人口の少ない日本で進化論教育を受け、君が代を聞き、小中高の12年間で苦しい思いをした事も多々ありましたが、惑わされず、自分が正しいと思う通りに行動する事が出来ました。それが出来たのも、牧師である祖父の存在や、教会に行く事を習慣づけてくれた母のおかげでもあり、何より、神様が私を守って下さり、導いて下さったからだと思います。

神様の事を知らない、信じていない人達に伝導する事は、簡単な事ではありません。しかし、神様は全てを計画して下さっていて、私達と共にいて下さるから、これからの長い人生の中で、1人でも多くの人に、音楽を通して神様の愛を伝えていければ幸いです。

新しい歌を主に向かって歌え。詩編96:1

無題

志村健一・志村恵子

日曜日のバイブルクラスに参加させて頂いて3年余り、ランドール先生には「大変お世話になりました。この英語による勉強会に参加したことで、今まで知らずにいた色々な事を知る機会を与えて頂きました。

聖書については福音書の一部を知っている程度でしたが、使徒言行録を学ぶ事で、パウロなどを通して、キリスト教がより多くの人々に広まって行く様などを学びました。さらに、新約聖書全体の構成など、より多くの事柄に関心を持つようになっております。

また、マーチン・ルーサー・キング Jr やガンジーなどの非暴力主義の考え方の原点となる、ソローの「市民的不服従」を精読した事も、強く印象に残っております。

現在はランドール先生の著書により、ガンジーについて勉強致しておりますが、私達にとってなじみの薄い、南アフリカの歴史に触れ、新鮮な驚きを感じております。

このように私達二人にとっては、視野を広げる機会となりましたが、それに加えて、先生の素晴らしいお人柄に触れる機会を得た事は、大変幸運だったと感じております。今後もさらに、人としての幅を広げていけるように努力したいと考えております。

これからもご指導どうぞよろしくお願い致します。

バイブルクラスで学んで

上原 進

私は友人の知念正人さんの紹介でバイブルクラスに入会しました。その当時は藤田牧師も一緒にクーラーのない暑い部屋で聖書と英語文献講読を交互にしていました。

日頃仕事に追われ忙しい毎日で精神的に疲れていましたが、日曜日の夕方バイブルクラスでランドール先生の話の聞いていると心が癒されました。

ランドール先生の唱える非暴力思想に共鳴する部分があり、私の人生の指針となっています。聖書ではマタイ伝、ルカ伝、使徒行伝、イザヤ書などを学び、特に隣人愛に関しては、人間関係を築く上で非常に役立っており、少しは人間が丸くなったと思います。（体のほうも丸くなっていますが）

英文講読では、ジョージ・オーエルの『動物農場』、『白旗を上げた少女』、ソロー『市民的不服従』を学び、特にランドール先生著作の『ガンディー・キング牧師研究』を直接先生から解説して頂き意義深いものでした。

教会の活動では、クリスマスのキャンドルサービス、キャロリング、ランドール先生宅訪問などが楽しい

思い出です。「基地包囲」「糸数壕見学」「対馬丸記念館」「平和祈念資料館」に同行させてもらい貴重な体験でした。

教会員の皆様には、色々温かい心のこもった言葉をかけて頂き、ハッとするような感動を覚えるようなことが何度もあり、感謝申し上げます。

編集後記

教会50周年記念誌をようやく発行に漕ぎ着けることができました。

記念誌発行の計画は、すでに教会創立40周年の記念事業として企画されておりました。当初の編集委員は藤田久雄牧師を中心に、名護良健牧師、ランドール牧師、神谷武宏兄（当時）、安里桂子姉、竹内はつ子姉、竹内豊兄で構成され、毎月委員会が持たれておりました。しかしながらその後中断を余儀なくされたことは、まことに残念でした。

今回記念誌作成を再開するにあたって、連絡や依頼などに係わる煩雑さを最小限にして、かつ作業を迅速に行なうことを旨として、編集委員も神谷牧師と私（竹内）との二人だけで行なうことにしました。

また40周年記念誌のために寄せられた原稿のほとんどを今回活かす事にしました。これらの原稿には、教会創立当時の様子が生き生きと描かれていて、貴重な証言となっているからです。したがって、50周年記念誌とは言っても、中身は40周年記念誌のために寄せられたものとの合本になっています。

この作業に携わって感じた事は、50年という歴史の尊さというものでした。寄稿者にはすでに召天された兄弟姉妹がおられることを覚えるとき、生前の貴重な証しをここに記録できることの喜びと、メッセージ（遺言）を託されたような使命を感じる事ができました。

ほかにもまた発行に至るまでには多くの方々の尽力があったことを覚え、ここに記念誌として結実させることが出来ました幸いを、神様に感謝したいと思います。

このささやかな事業が、普天間教会の歴史を考えるよすがとなり、今後の成長の一助となることを願うものです。ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

編集委員 竹内豊